混効験集

乾坤

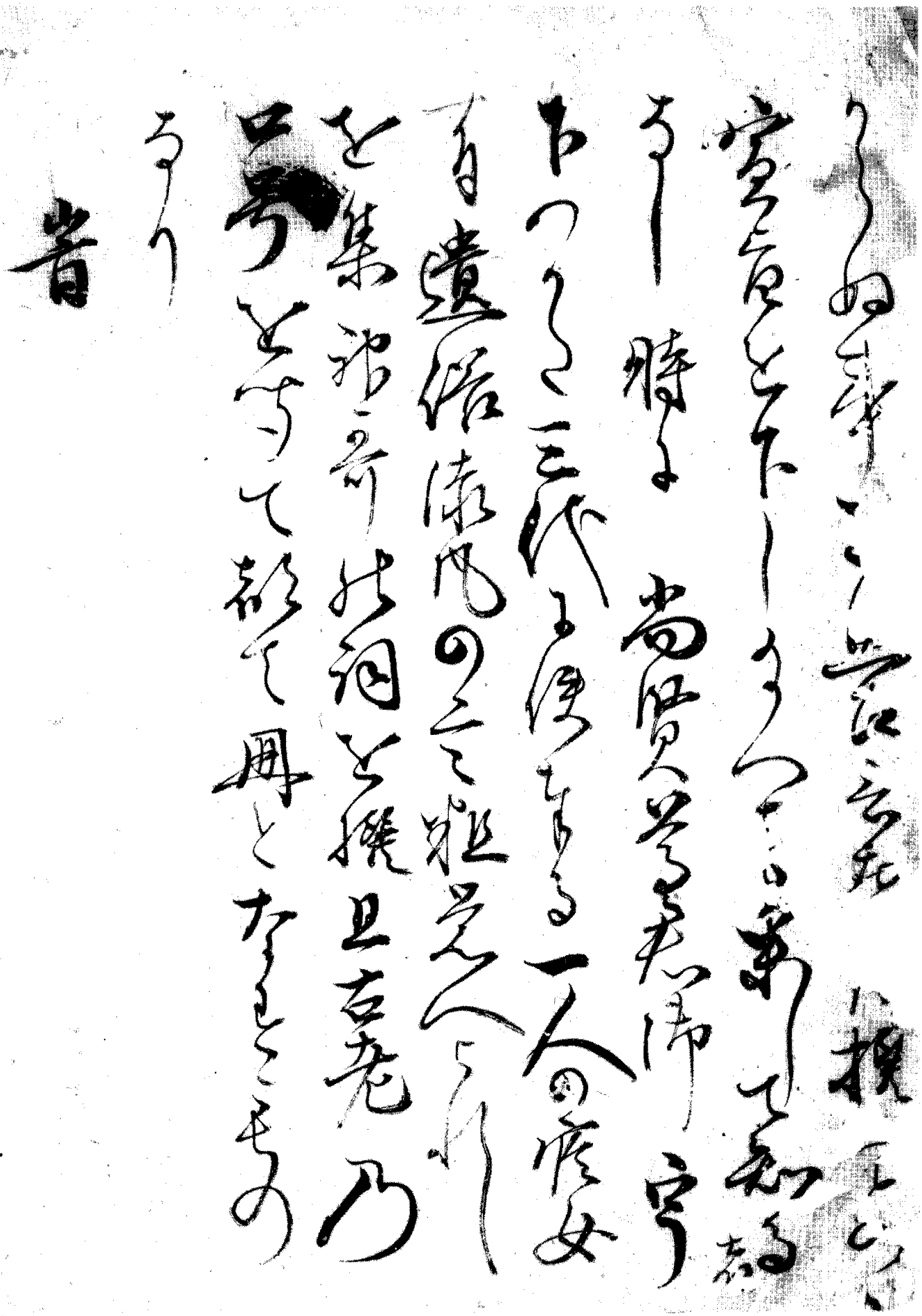
評定所

文化課之蔵書

文化課永久保存

混凝土試驗集

許定



文清廉之士等ノ
和二十六年
摂政
越来王子 朝奇
三日宛
識名親方盛命
田港親方朝由
浦添親方良意
奉行
松村按司

立

簽名

乾坤

てたれさやか
おたさやか
それあたへ

おたてさ　日天の事
おはさ　月天の
七国の事

人倫

皇帝

皇后

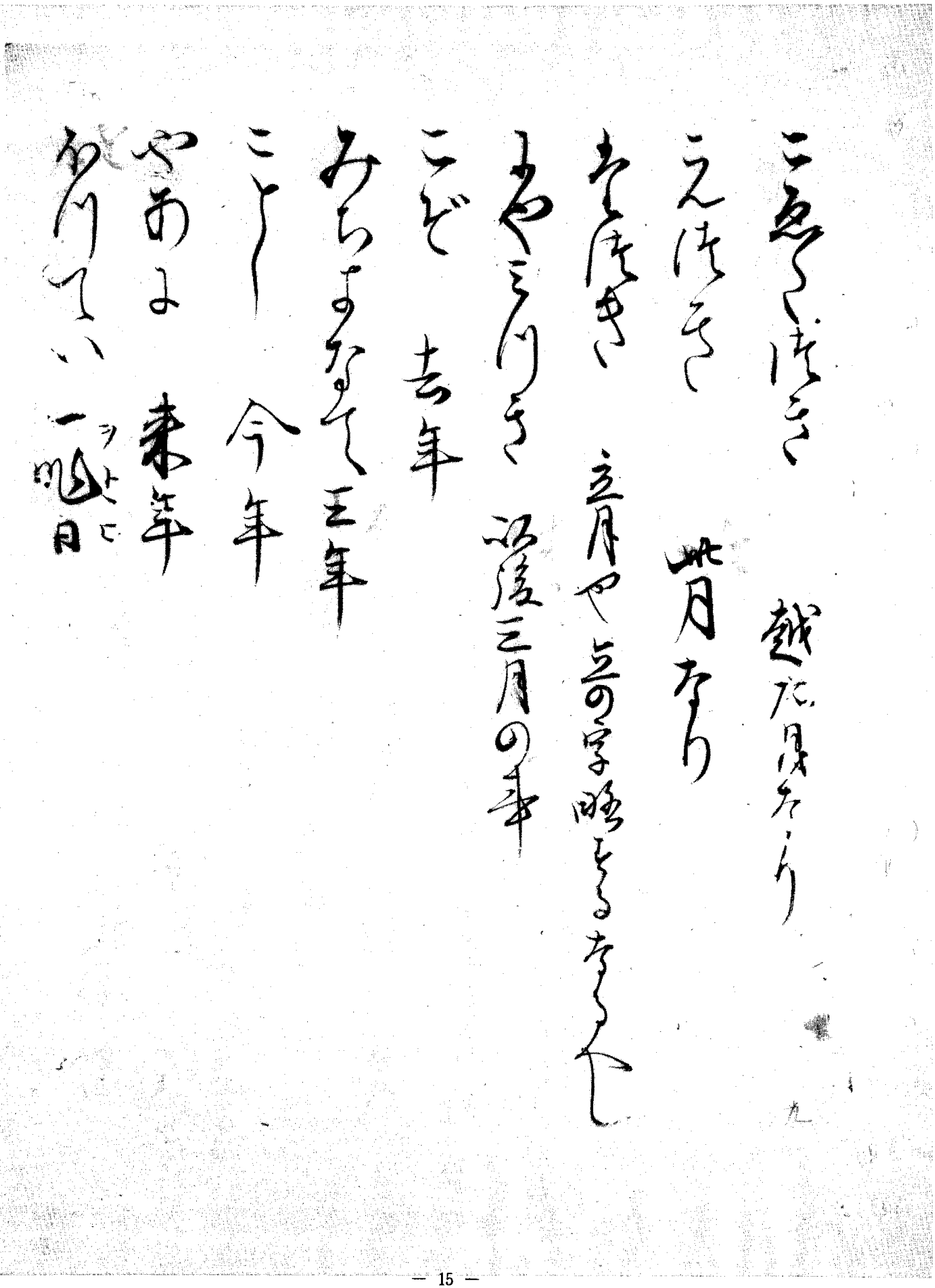
皇太子

春のめでたさを
御方さま北の政所 并 御上様 御方様 北の政所
春のおまへ 国もとよりあけ
にまいらせ候 右之通
あとより 三月末
おくやうの 銀子 新
おまへ
右之通
御物をも
おもものがたり 御沙汰
おさまるのそば 御満悦

時候

二三月末の候
四五月初旬の候
夕
今晩
明日
昨晩
翌日
この節

なるべく、翌日（ヨクジツ）まで
すとろんてる 飲のます 和訓 ほそみ
をかま ぐりせり
きりひます 夕方から 八時から
こしらえ 時から 入れます 入れ方 とこだわる
もこなし 青やや ぐりせり
神か 材料や 揃います これら 材料これ
とろろすなり
なるべく 早く



さて　此日
みとめし　赤間の手本　和漢一六明国云
ことをめしおけて　ねむりてこれを
琉球よ　あやまるひとうの　ととまる
ゆびくひ　夕陽日　和漢も有
俗談よ　まもりてまちこまれ　そハ
町行おなごん　琉音よ　ととめり
なれをあらうをそれあるとのあとり
使のこころもとをそ
甲子　以記

秋ぞうとう 職行 経よハねぶそやん
かくたるう 開静 日出(ヒッシュツバウ)卯の撞鐘百八のそ
とぶ
すでん 昏鐘(コンセウ)鳴 節用集よハ新しき
するなりこと大通音なるべんそ黄昏(クワウコン)
成(シヤウ)の撞鐘百八の聲をこゝなり
よなべの 朝(アサ)よの撞鐘百八のそうをこゝ
秋くらく 来且寅よりなん
ゆうまぐれ 夕暗(ユフマグ)そうをこゝん

支体

みなひさ　沖縄のう
ふおひさやう風　美沖頭なり
うひたへゆこ　迷の事や　たんたよくふ
ひたへん　いもりくたふ　魁（カヴラ）ゆす

氣報

うやく　鶏のう　夜ふかし　夜明し
あひる　教る（アヒル）のう　お魚ふく云
があな　鵝の事
ばあり　鴉の事
はうびだう　鳩のう　屋だうと　鴿（イエバト）
ふくろう　雀のう
ちどり　千鳥
ちがう　喋のう

あけぼの　晴怜のすゑ　和泉式部

とある日本國の秋のそらにはぐれもの

乃あをと林はるた林間ともや

どんく　雲とふひこそ風もと

ひやくさもやもち　雁のすゑ

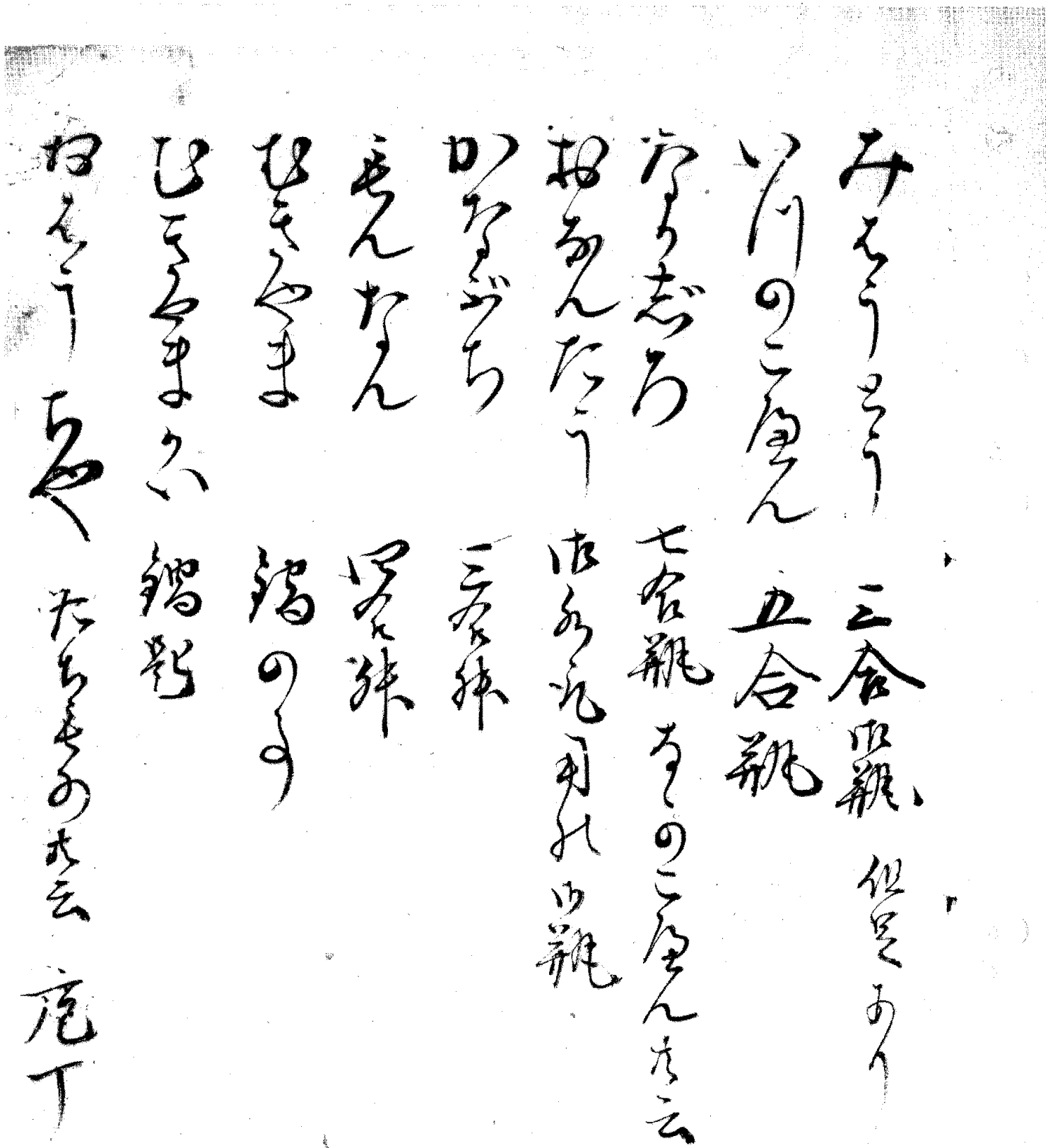
かさとせもやもち　鮭のすなり

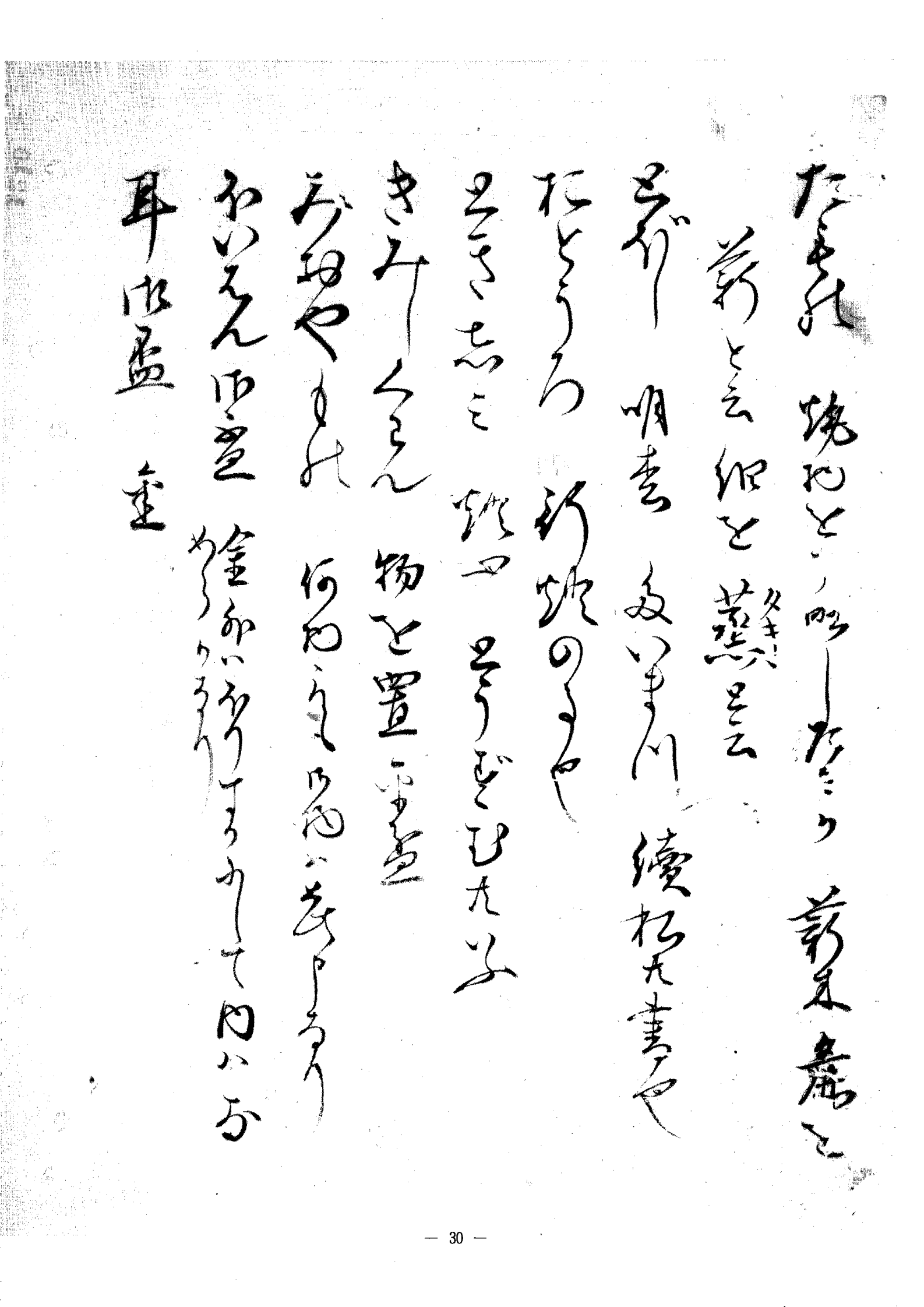
ひとへ山のちかよの振袖なりとみるや

草木

器財

こうよ　金ようき
なむだや　銀ようや　和尚よ（土）南蛮とこ
あこうね　銅ようき
志ろうよ　錫
くろうよ　鉄
たまうそう　玉机
おしさま　御座
こさんご　御小刀や　和尚よう（土）ごさ





ありやなしやと　御寝の事

なやみつゝ　出杖

みぶるひし　御枝

ひそやかに　紙

みもだえし　御硯

おひこゝろ　御傘

ここちなし　用之

おみあしの　冷傘

後ちよこそく　ろくのつゐ（イチ）にろり二（ヌ）ころり

辻うちこい　辻そばうちこいそば

おまかり　茶碗のおとふわ引もかり

こんかりまかり　まきりのり

おうろい　菜皿の事　うまいた云

こねそれそり　なおかり

こらかう　子の事　勿論よいこらこらこと

以上

こねおやらい　御菜履のうさばいも

よ　勿論もさばとも勿論ことに茶

履流てみちのくの泥よいふるさと弥中履
まて党よそほふるとさてばうちと
ふ
ふでや　御本履のやうなり　和賀
のうちとも徒然なるよ女ともけふ
何ごとそ作まても笛よ庵もとも
とそ
ふでまうさく　御料足と書あり
御姫様御婚礼の中納言殿と

獻上の品々左の通り

みなさま御祝の事たてまつる

心ちよく賞翫之御神酒入のもの

そそうへこそ　ちる桜ごぜいふ

家屋

[illegible]

こうねたとん

よぶとり

よりもち

もんもこ

御書院がま

御書院

西の御殿

百浦添御本殿

常住御殿

仏餉又供御
用のもうけ

おうよりの小有もうけ

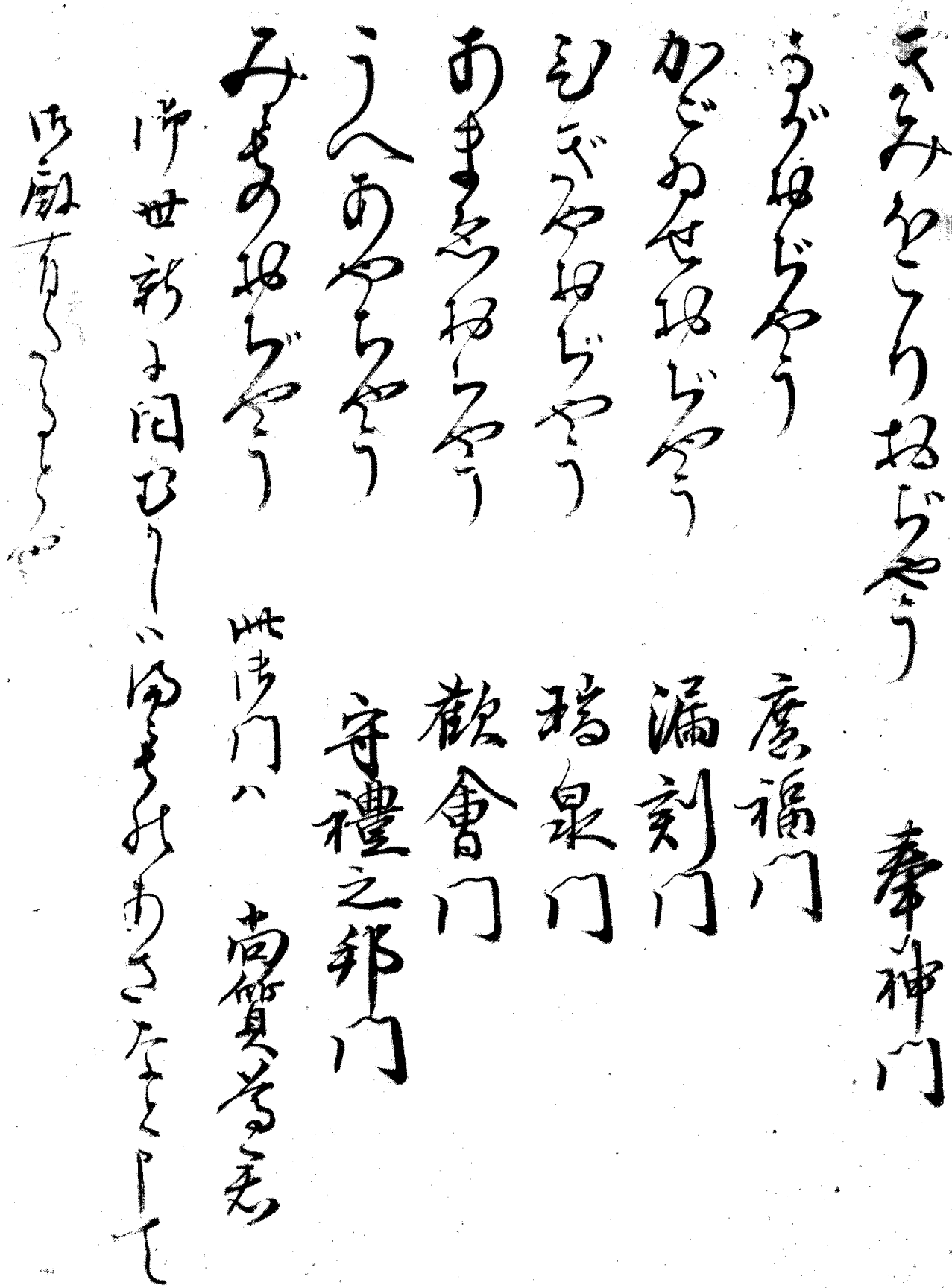
右次本堂所の事

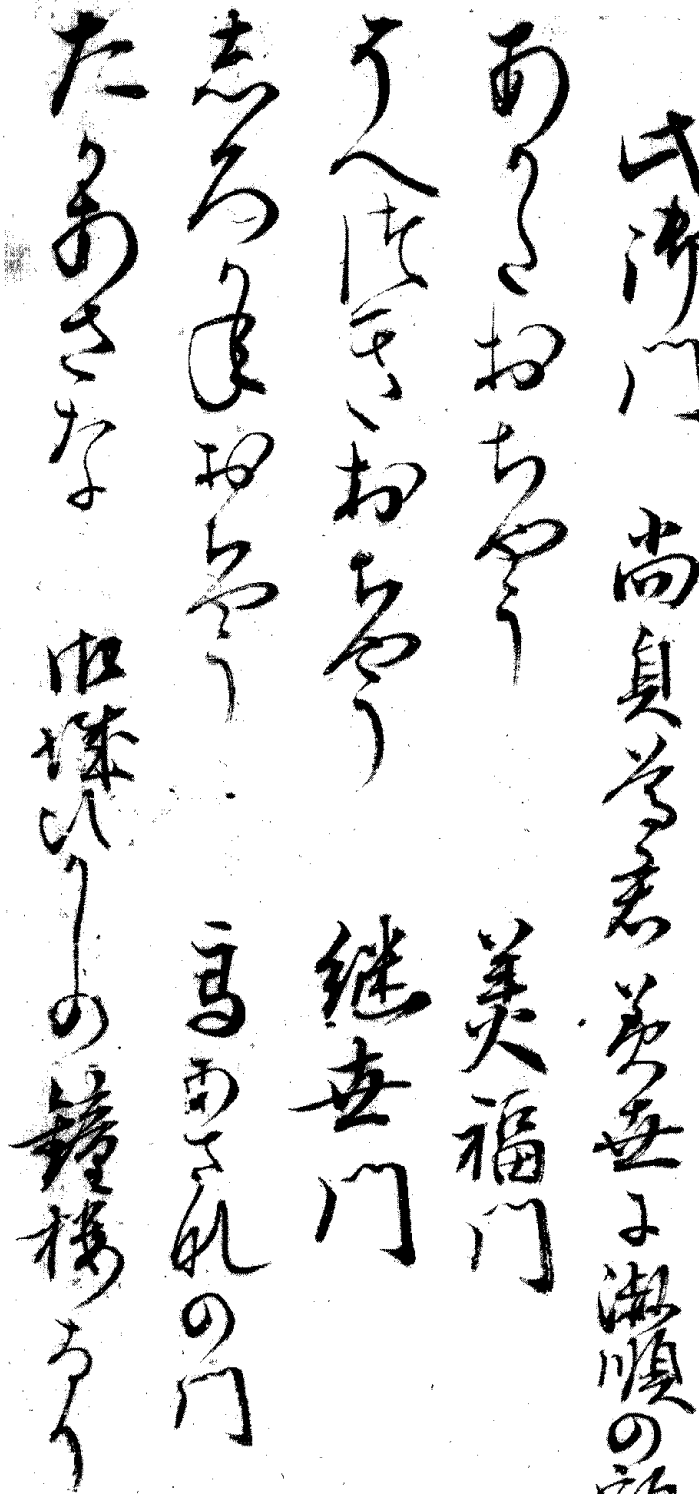
奥御書院

鬼の御殿

水屋所

表玄関

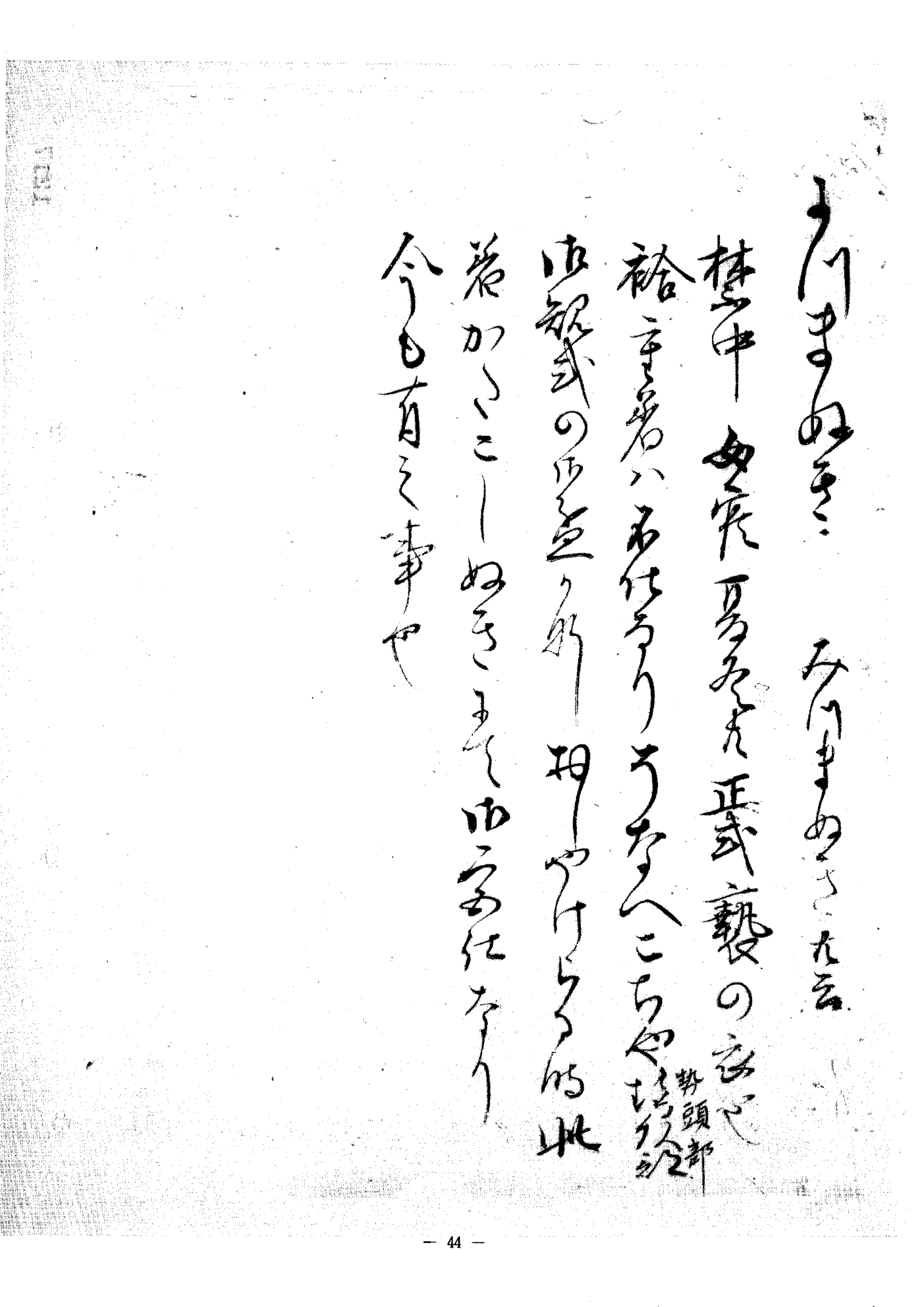

奉神門
唐福門
漏刻門
稽泉門
歓會門
守禮之邦門
此内門ハ高麗考之
事世新ニ用ひ一ツ門ありさなとゝ
ハ同制ニ



十二まで（あぶれ小の鏡楊や
答まい　子女の癆咳（ヨウ）（コナカレヒユラカレヒ）しくもろう
おびさふいごろう　平等所
松ほうねごん　大安座
よまさり
小川　雪隠の事　俗よごそと　東日記
おんぞと　御前のうち

衣裳

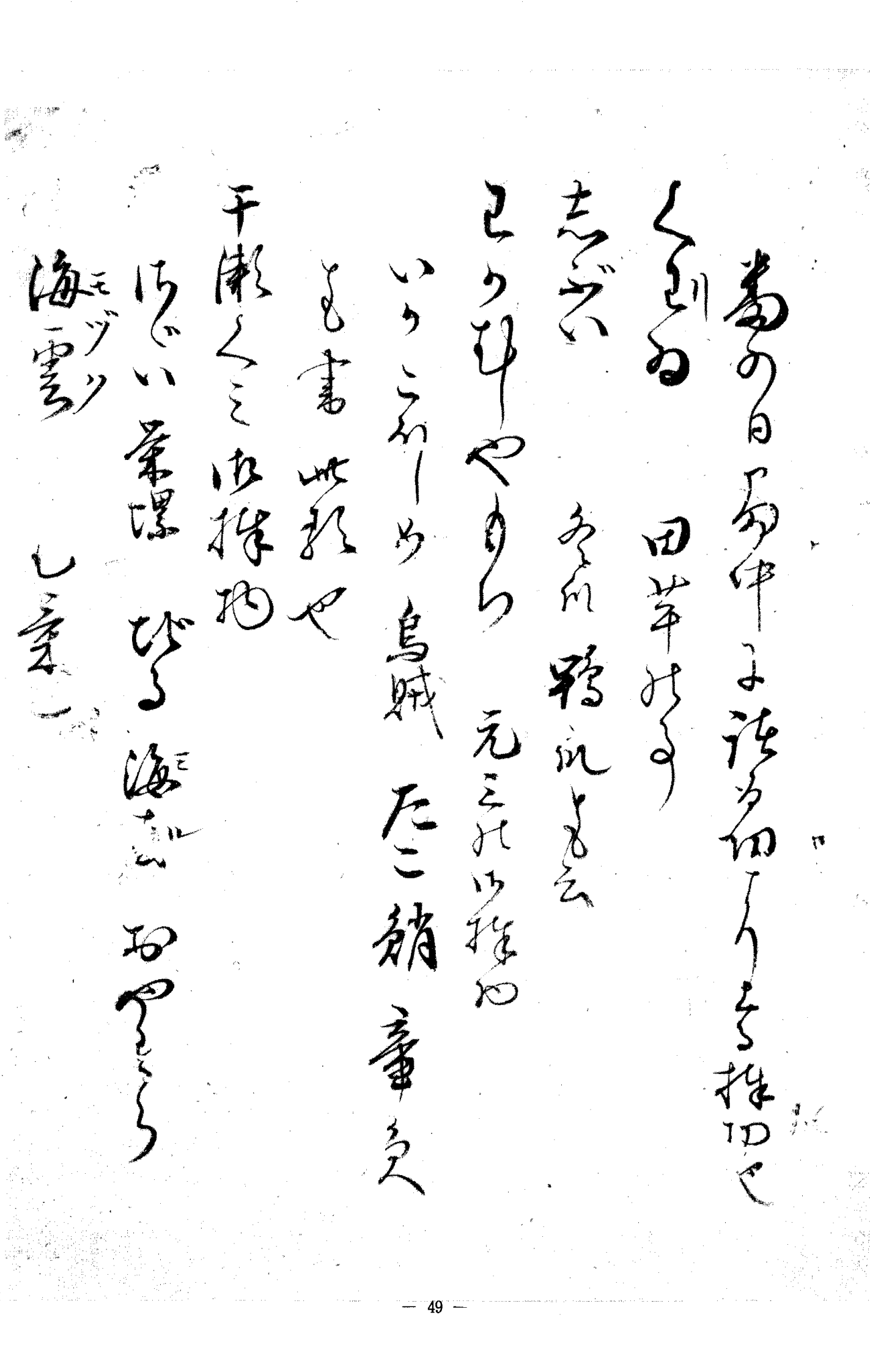
たまむすびのかんむり　玉の冠
そでそろえのーよ　唐衣
おやなーよ　御衣
そでーよむそまよ　御袖衣袍袴なり
おやそろえまじ
そでひりそん　御帯なり
なりむすび　長御巾なり
ひきむすび



— 44 —

飲食

中有 形を と書と有
もろんの如門ふらいぶ会ありさまれ
旧裏吸のさこそうの時うたうかうう
和の人々ぞ出て来れと云ふも
あらべとを お事のとうう
などひかれ 御機嫌能うる迄事も
たいほけ 四幼稚の事うう。
をみうるは よ・ろべきを
そうもうあ ーもふひ



やまもも　楊梅なり

国分寺の辺にて小枝ある

ところをもとめやどもり

霧雨ふりたる

山の古物　初夏の雨推と

歳暮の古物

なまけやもり　れいやもり

ひそかにこころこれをもはなをもれたる

訳し

鳥麻とる

こととうを知るか　意富加牟波と書　赤牧
のすやかこそともに和名をこと
めこいひとも云浴牧と書
みなぐち　英牧のすや　おそろたる
おとろおそこ　儋耳（モニ）の忍名や
たくとり　沖洲のすろう
有里玉府仲処紙もえよ
あまおさ汁　酢の事

ざんぎり
粉もの 後紀等に強きとも
もの 粉は就一もの 強きとも
ときねりて入ること
たてとろんぐ食い 小仏解
おもやがり
ますしか 塩の事や 採用雲等よ後者
たとえづけ おさかしよ かとざい
焼酎の糟とも

はいづな　　そとうの糸精と云
ゆうう婦　　山豆腐　うう
ひさやこさい　芋のつる無芋と田芋
　たうもとかうんをいものつや
こねぎ井　　ものや　　あすもも大云
まめぶ　　ふやのつ　　豆茎　うう
ひえれだこさ　　をたうやつい　こう茶漬のし
あくな　　雑物の事
たいこね　　菓（タイ）服（こ）　　ねうのた云

15501

さたいこと　胡葱（キニンニク）　韮（クイニラ）

たうやけい　菜のこと

ふうそくじだ　菖蒲のこと　うじでんふ

玉府雑纂よりかきうつす　有本朝

かみこと云

さいこさうと　仏名ひること云

さいじゃう　雞（ニワ）の事や　さうひらたふ

おひさうと　蒜の事　俗はふとうと云

たうすり　茄子（ナガナビ）　水茄（シロナビ）

嵐峯紀行云

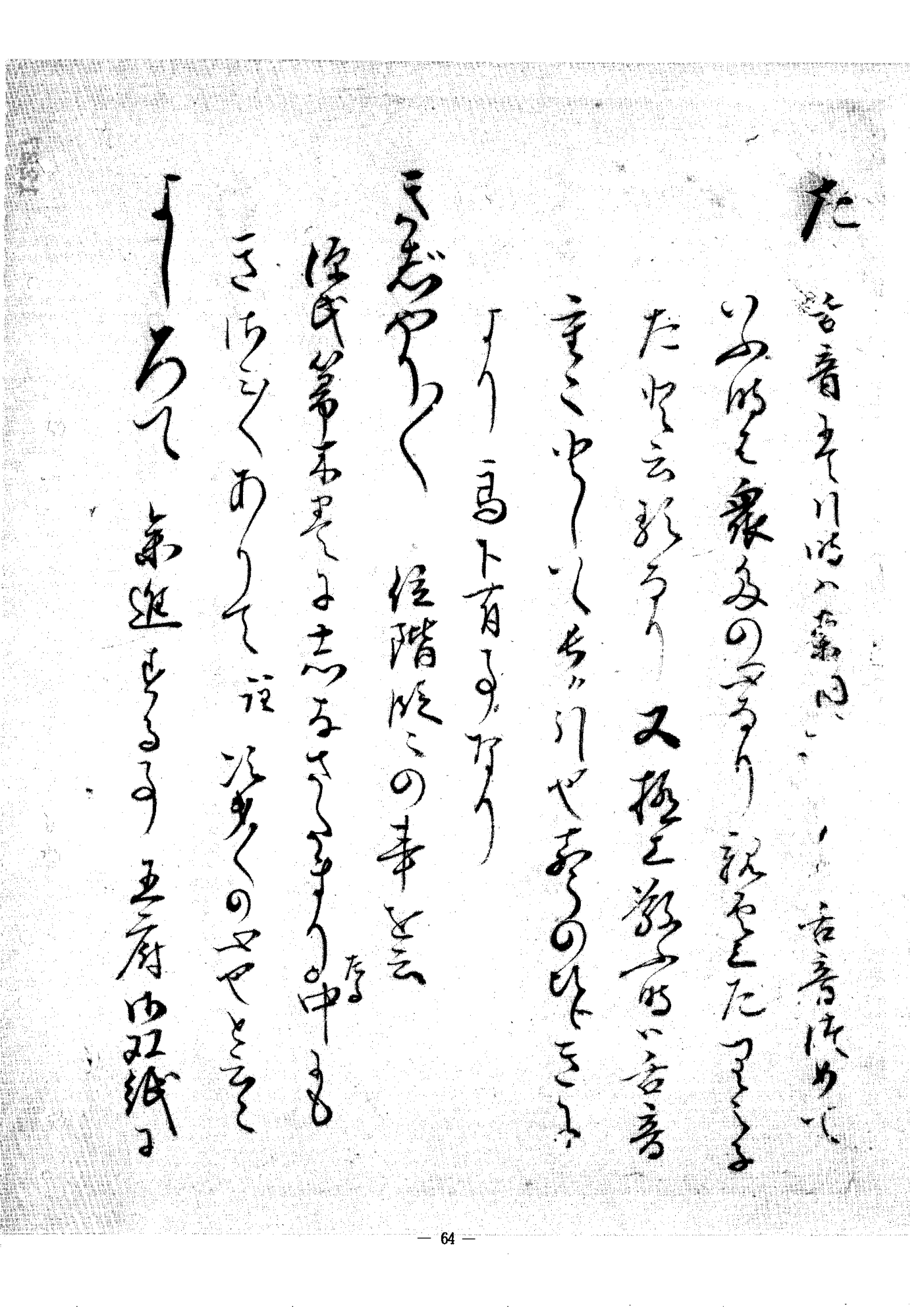
ちぐさの名　ちぐさの事　名紀と書也
和名抄　金ちまき　緒紀　茉紀　布紀共云
くさぐさのうち　西紀　多紀とも云
いちはつび　霞紀（イチゴ）　苺子の事
うらうら　紅色のもの或　菜色共云
白角（シロサヽケ）色　紫紅（アカサヽケ）色　紋紅（アヤサヽケ）色
こうもい　胡荽（コエイ）のすたり
うへさうり　籐表　苗表共書

かくしな　常山茗(クサギ)の事　くさぎ
だま　蕓(ヒル)菜(ナ)の事
よやけひやもち　藥のす
こがん　御菅(ゴゼン)そう　蕗
そのありたる　牛肉のす
ねうし　ありたる　豕肉の事
かうのありたる　鹿肉
麋(シカ)ありたる　山猪
ひし　ありたる　羊肉

こうもりや　鶏卵のう
　　佐渡こうえ　むつまふ
ひもろい　久年母のう
　　こうよろぐ　ふくく　檜こと書くがあって
　　そうか　ドうり
そくあくとへ　漬楊梅のう
ひと　杷杷なり
ひいつや　芭蕉の実や
　　ねたやもち　たそうこと　佐子ちゃもの

言訳

おりされ　おとゝさんとあまのところ
たりされ　そよまれとゝ事そう
ちと御ようがありまされとゝ
ゑやもあり　ゝ事とゝ
ひりけさ　をたゝすや
だとさまゝ　むとゝす
ぞよ　被もとゝ　ゑもゝゝまけ
ゑやもとら　進との事やとゝ



年中は郭氣候のそくとも文作
春をおしてうるまるるるを
ちとやもえうんん 景竹
集よりへよ

まるうや もるもやや 初もも
ゆうさ稲(ワサイネ)と早稲(ワセ)とうう
うたと 古意(うやく)のうう
いちまうや 事業を思ふ作うき
とよ

みまこそまま 麦(ムギ)米北方初を

ちゃりん礼　第誠

ゆたまもとつみとなり　称歌よ

たさも初　主の有ともえ

あるまんちゃまねてとて

ちまままさ　美業なり　情の字と書

和句も過ぎ　法外なよ初よさ

ままれてもみいまなまれ

ままちよ把つまはさたんと

有ロつり

非常と書き
そこひとと　実よさあもとそそそそそそ
さへむ　そそもさへ　琉歌よ
あそよさそひ心のねせをよもねよれ
おそそそけよゆやぬんやないそそ
やぢ意　わとこ已後事なり
わそもだい　食わの膳俗とこ又さもたい
よもとけそこ
みよがり　御奥へ　事なり

T33

おもり 兼ていつ

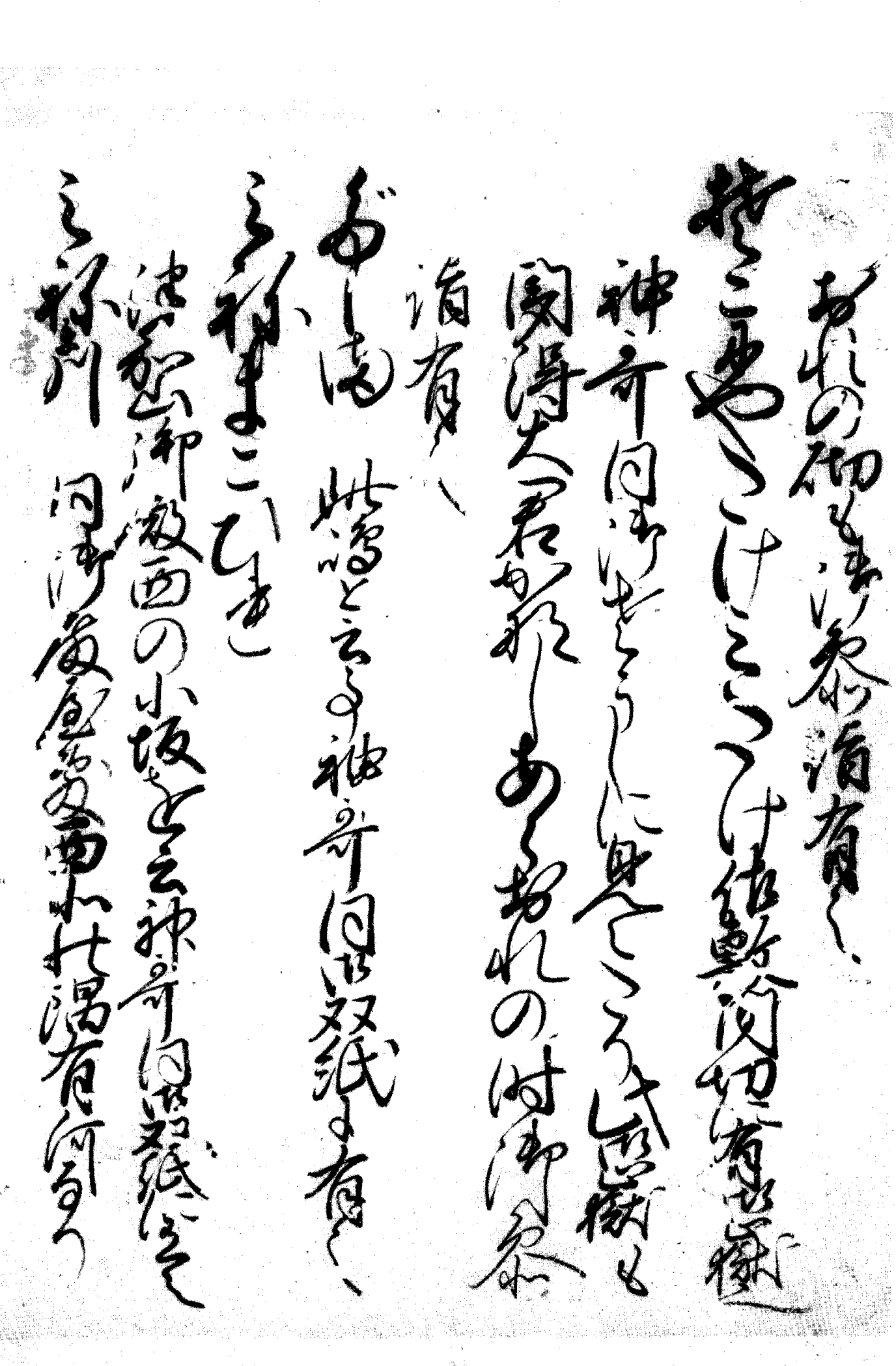
諸の字よ當 件の二ツ音を長く引
時も在の詞ともり 音弱く引ても
弱く發ともなり 高の低をもち
高下有事なり

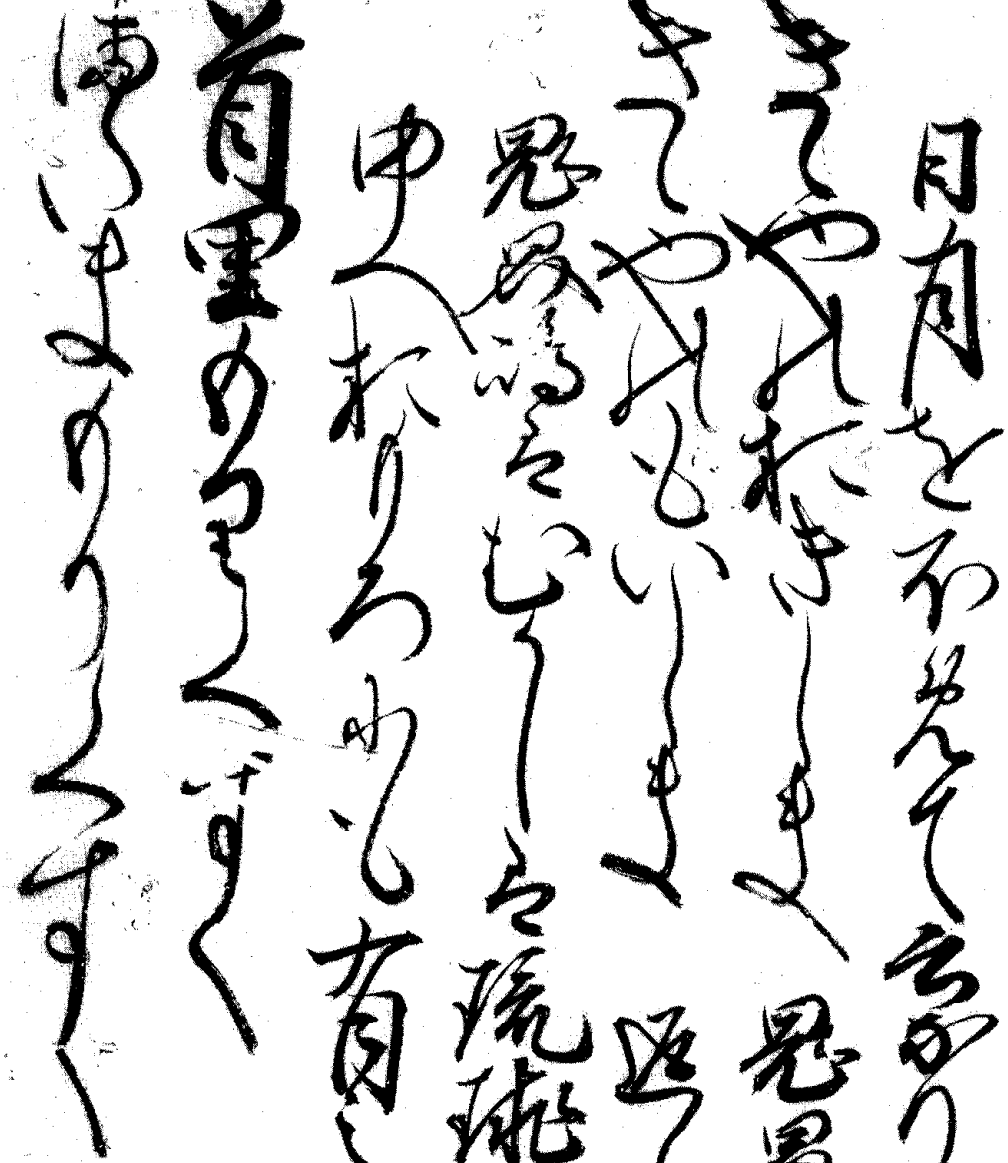
小學 張思叔座右銘ニ恭諸ハ如ス言ノ
應ス諾ニ行諸ハ皆ニ應ス辭 應ヘテ之 言ハ則
思ヒ踐ンコトヲ云ヒ 恭ハ如是也 諾ハ承ケ應ヘ之辭
也

混効験集坤

評定所

乾坤





国会図書館

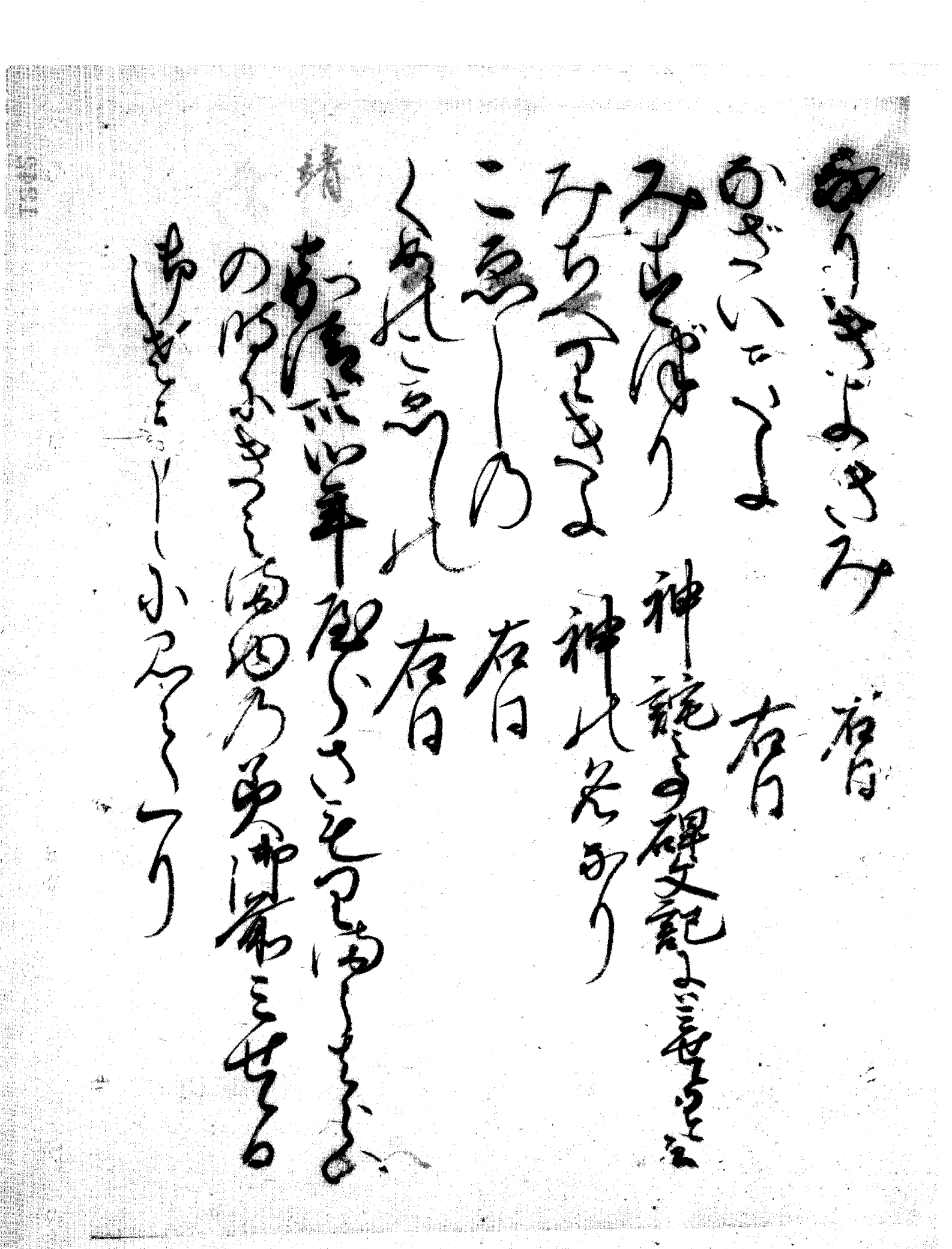
やまとことの里　風ふきわたる夏の夜の
こばしの　久しき住吉の名のみあり
さもよし　清き山のすそ又大かたの
月ともなれば、
あまりあり　さても嬉しや　月天神の事
　　都にて二年風ふきわたるまうちたる、
　　のぬきこと申のこれ茶こせてる器よ
　　器そり
　　ぬけ　　ぬき　　みちよ夜船や

くもく世　善き事あり
琉球國中碑文記石門北面よりの
きこゑ大石きりくれはせる小
おくもよ　又祠　くもこゑの
いとおそろしきをおくもよ
くもこゑをまよまもりよふ
のまもるそいちよりくれはよ
こち

神祇

あけ〳〵のかしこみ
あけ〳〵のろかし

神代ゟ今に至るまで人に
守て神祇有程、神妻ゟ無事書有
神事ありまゝ忘れざるやうに
あまつそらつゝがなきやうに
天津ゟ八十書流祓国祓罪穢神祓
けをこと神代ゟ定めり



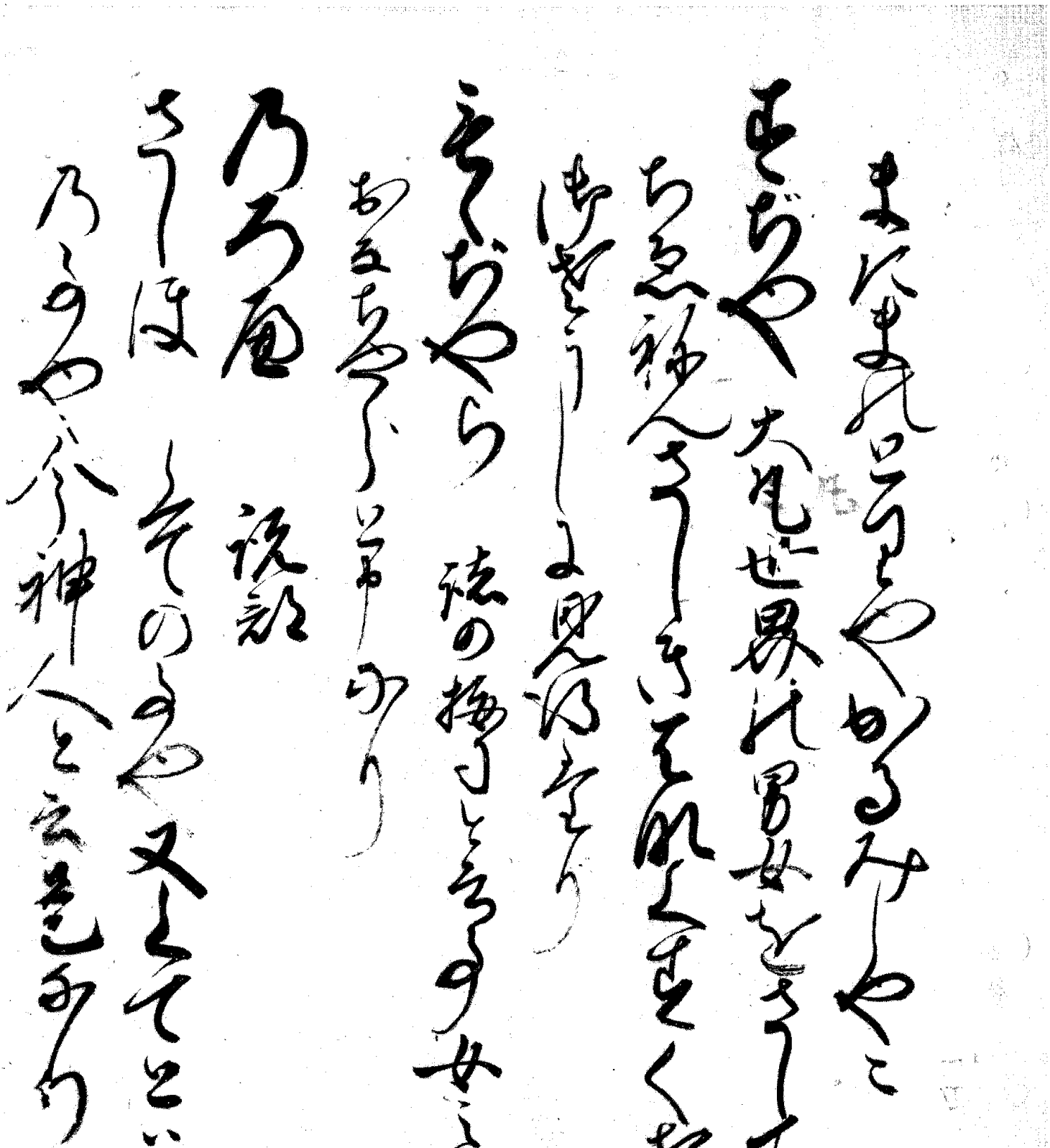
やまとのかみ　山の神の事なり
さるいあり　文句神か神の事なり
あかるいなかうつくしやかの神と
なるいなかうつくしやかの神と
おもてあらはれたまふをもて
いれちやはかさちやる

人倫

すまや　出郎ふたりと云浦数軒と云り凡
浦数戸なれど和流小云源氏須磨の名小
山流のこれりて此地に結ぶ名ても古き
人ぐさにすべ小まくさまざまはとなり
志ありて小山流の明りたる面ともに浦数り
流河小浦数湾ふと書てすぐうてるる云
とに　女房ふうと和河おい女し思名とも
源氏通ても名し小とに　今し月名数り

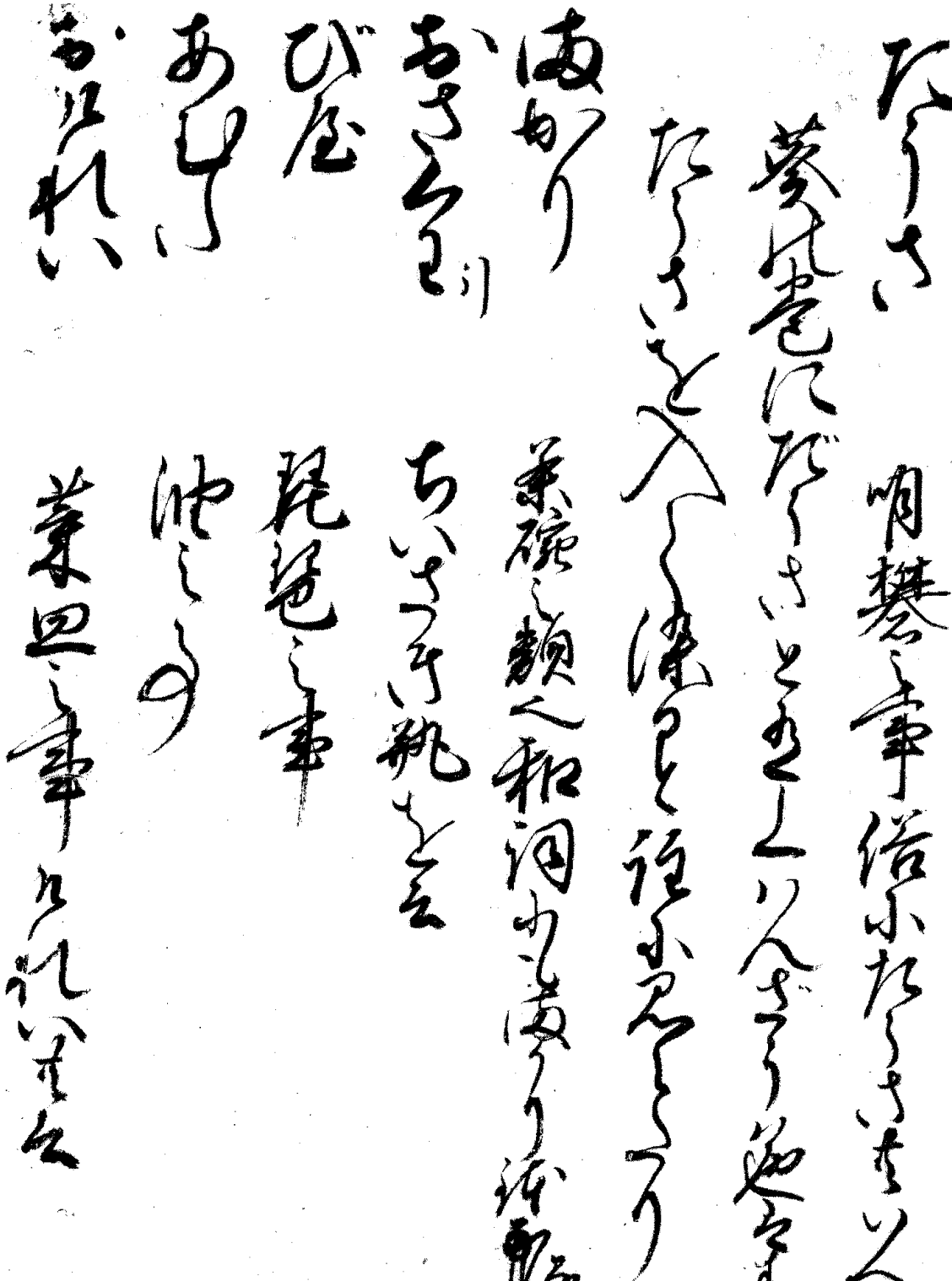
二月十日　晴　神奈川表へ
始めて　水兵上陸
てうち　操練所
時と変り　白衣婦女の
忘うと変り　風俗の相
いまもありありと
若き日の
老の思ひ出
それより二泊
神奈川出発
小雨そぼふる

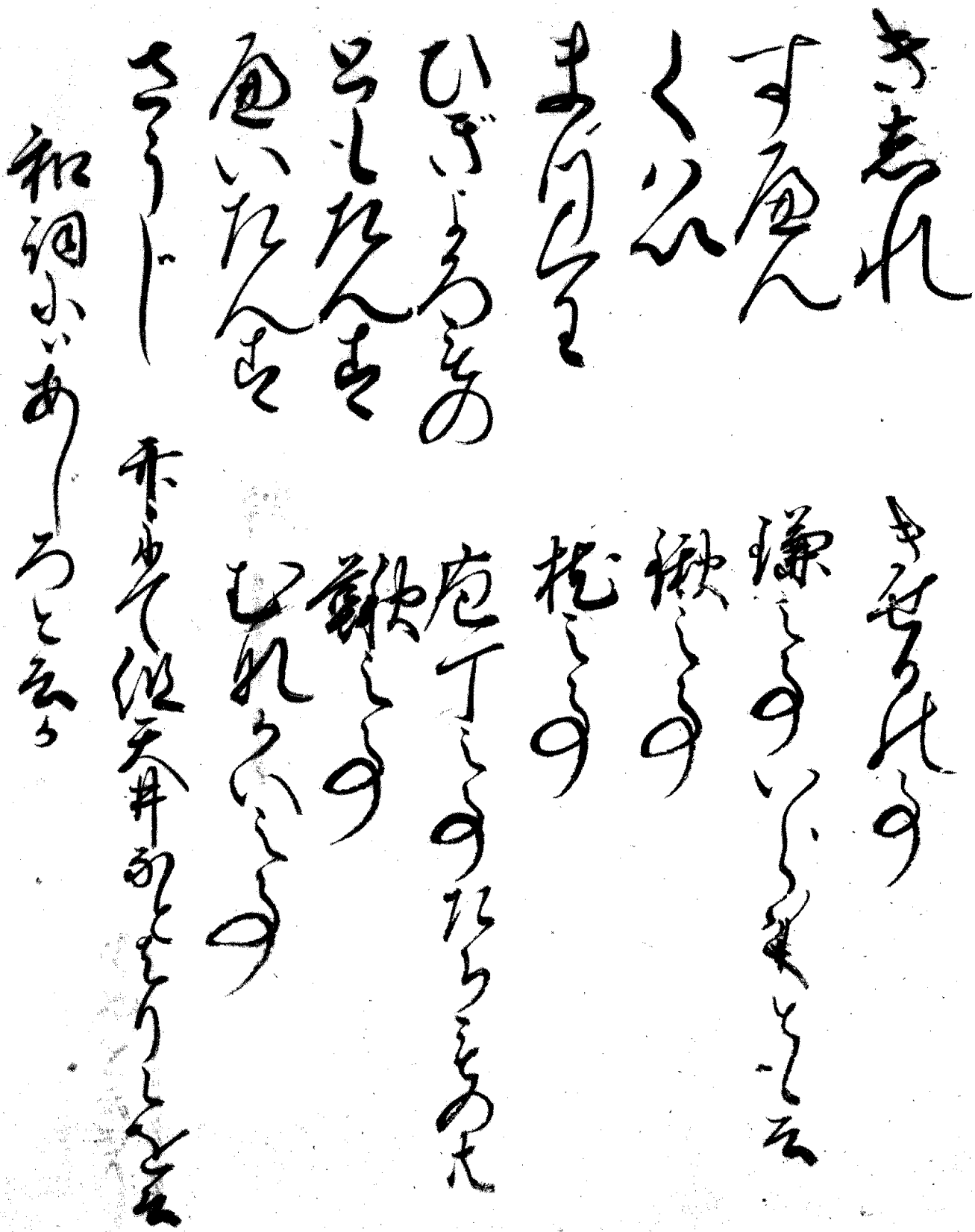
さて神人(かみ)なる人(ひと)今(いま)原(はら)中(なか)事
なりしこと法王(ほうおう)心得(こころえ)ありおもう人(ひと)の女房(にょうぼう)をもおもう
人(ひと)の女房(にょうぼう)おもう、ものの如(ごと)くなり
てくいこ帝(みかど)の筆神(ふでかみ)等(とう)小(こ)前(まえ)をおもうてくいこ
いこのこに前(まえ)を小(こ)児(ども)あり帝(みかど)をもうこと
しまもう孫(まご)なり和(わ)尚(しょう)小(こ)孫(まご)をもうことをまこと
おもうそうて女(おんな)の事(こと)をば法(ほう)度(ど)ありよ
しまこまでいたりおれよりおれをおもう
ことなり



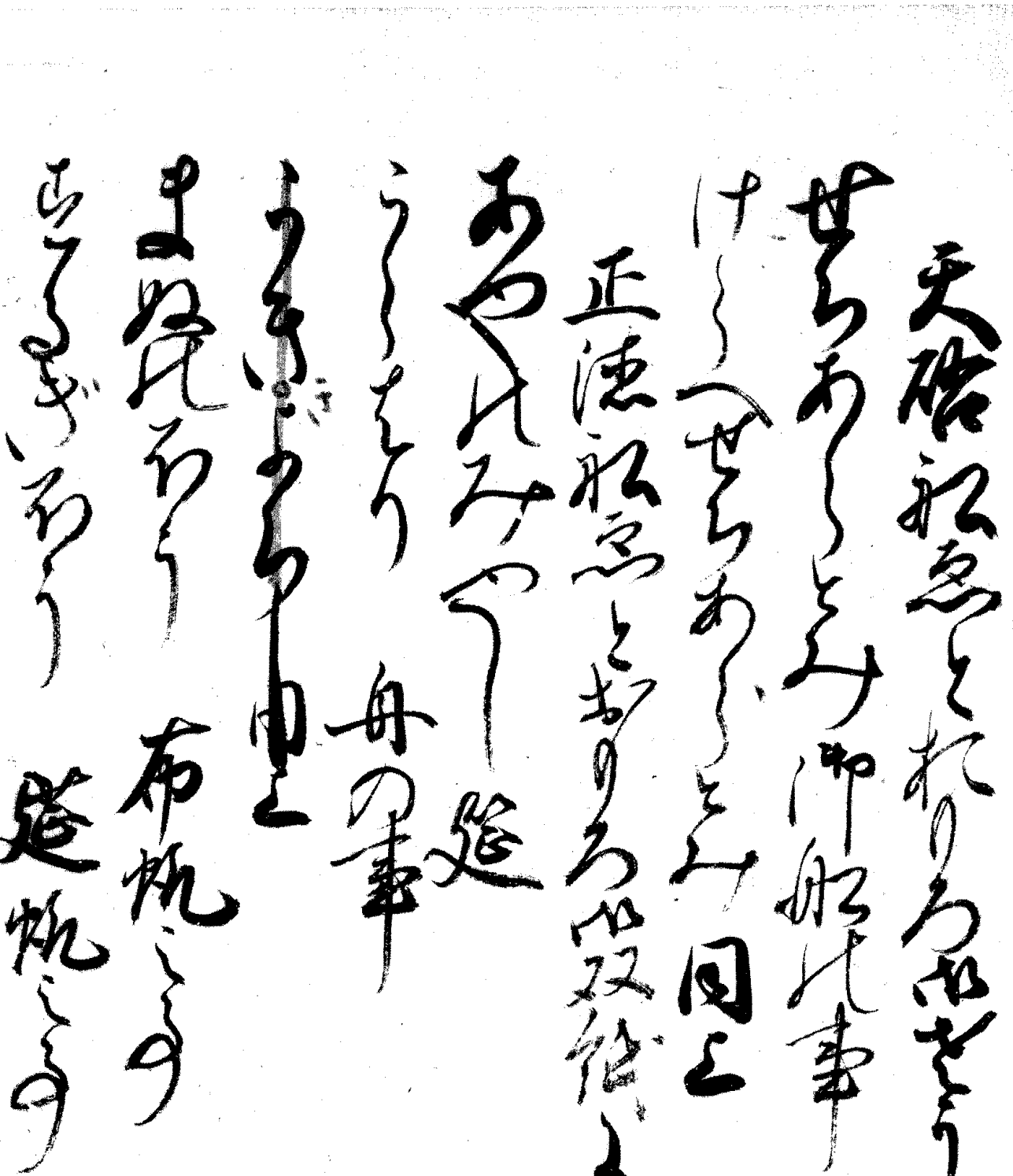
天保三年、私ども一統のありこれ祖、ごんべら
おりう神やうう　又両　せうじ神やうう社名
おりうのうじ人や中神、祝詞ども、
ごぜりこ
なりたこと　又両　祢宜たこ
おりうの名人かみておりし神やうう
安政四年　神主人や
あうのこ祢宜たこうりうちうこれ
参ら
しの忌や　おりうそう　義祢の言ふ

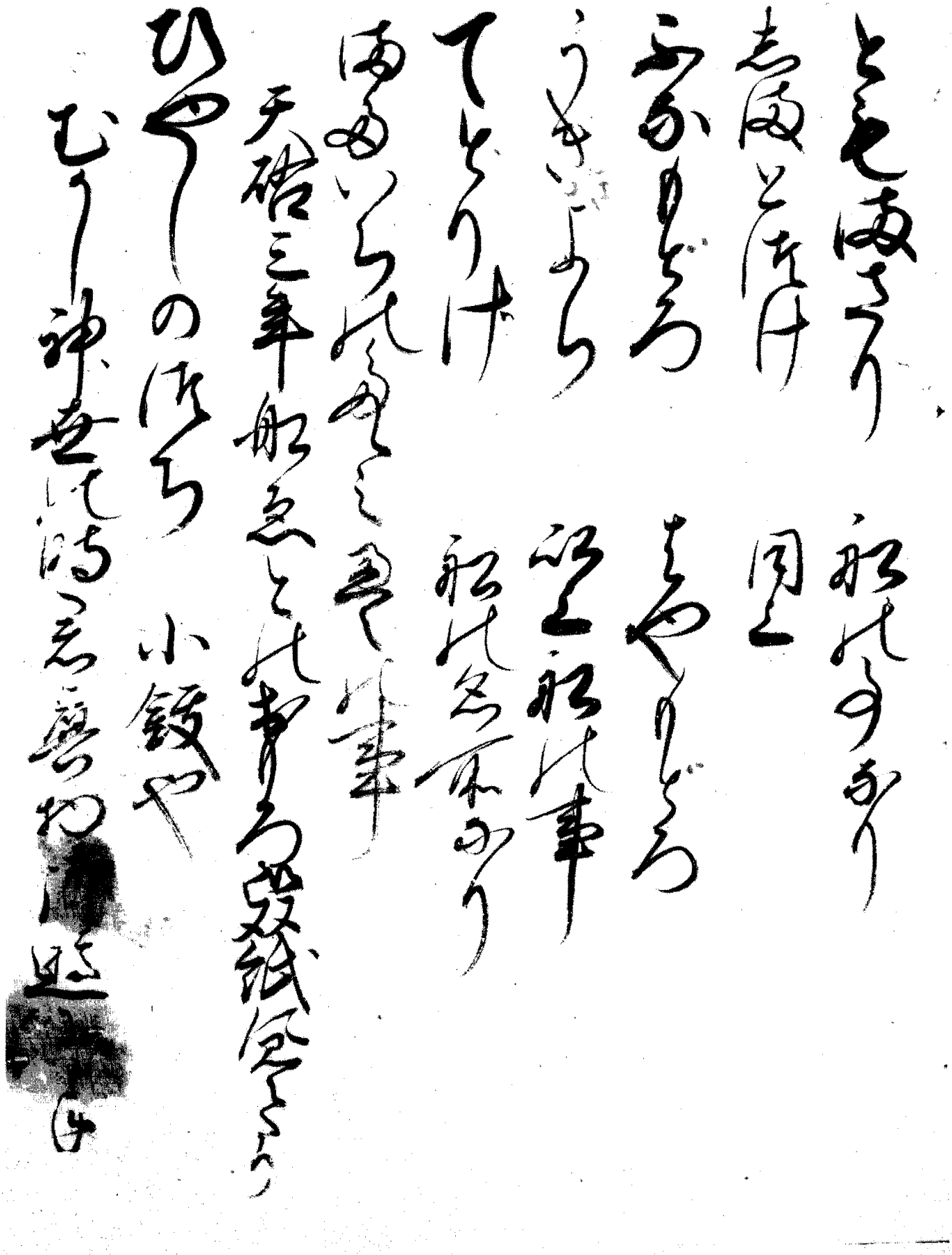
器財





せちよせ
御城よりみうへのやに殿九名ゟ来ル
よりみちへゟおよりせちよせうゟ
そのこ
たちもちやうら　賓劔ノ名や
てうもうる　同
たちもちやうはちよちよちよてう
よおてうしちよちよ
急飛こもずこもり祢　松の書ノ





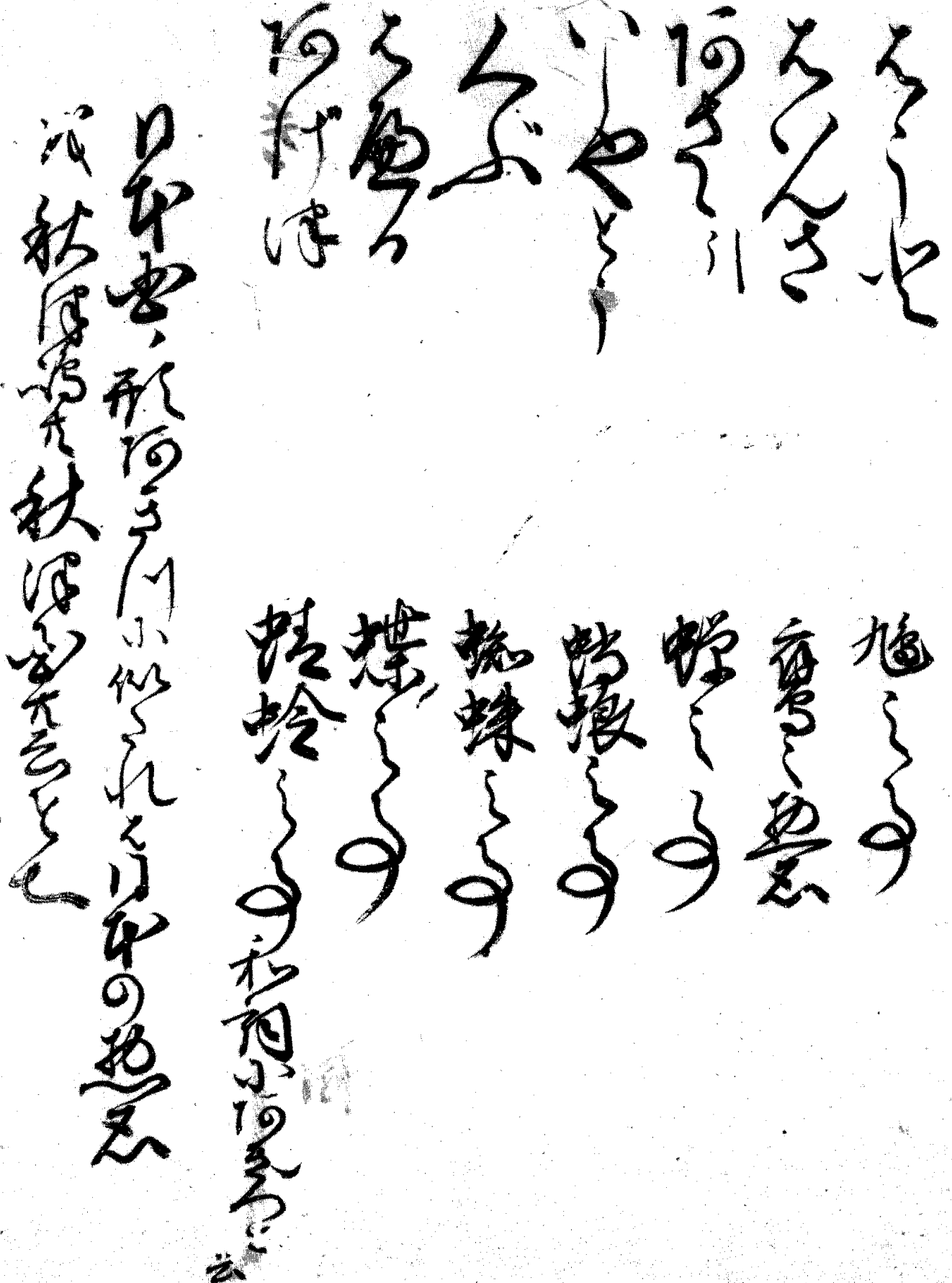
Page

初まりて祈るなど行事など
神楽と雨ゆる小餅花もあり

氣形

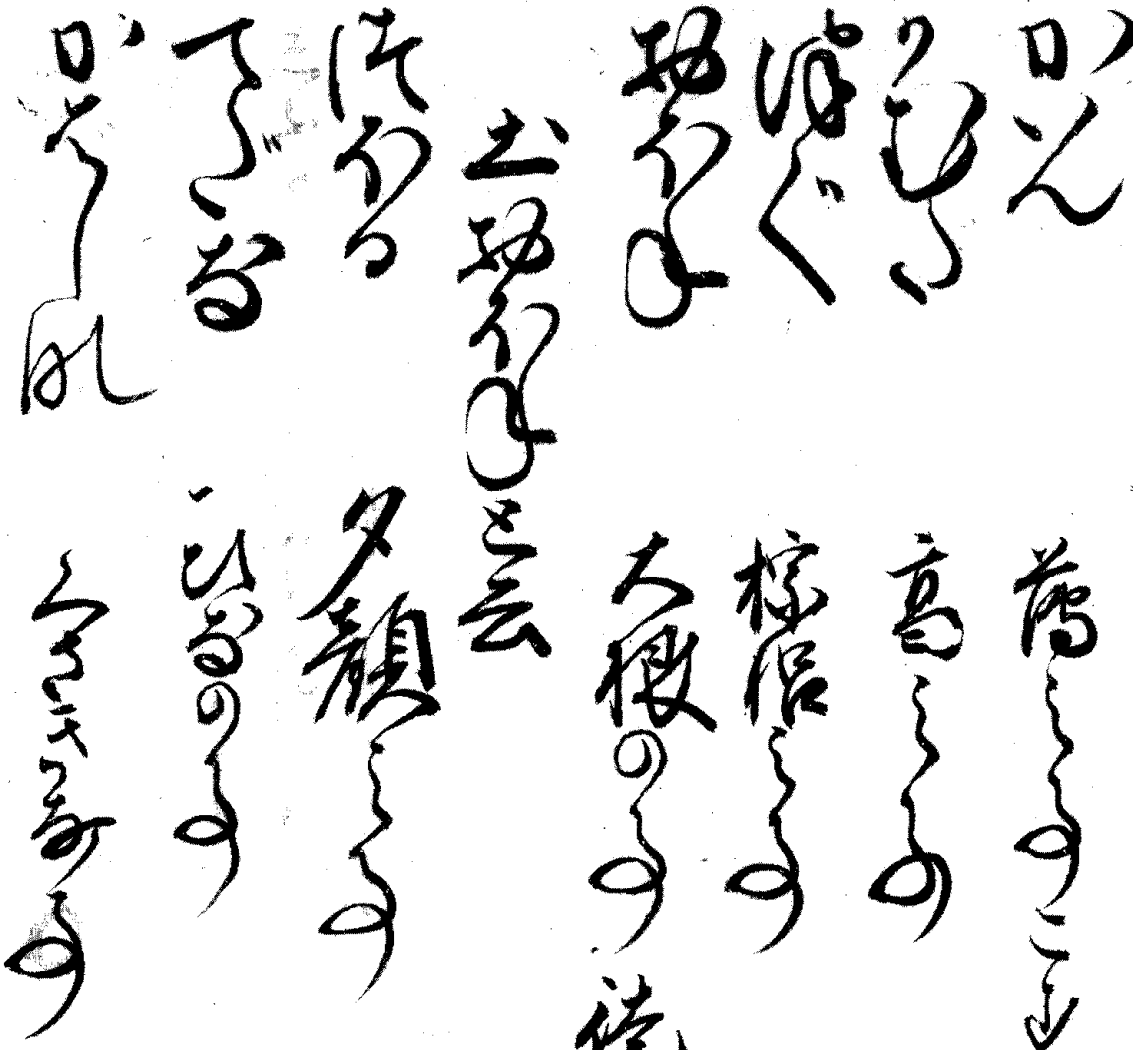
ひつじ
まや
もも
まつり
ひよす
すさよと
ずく
ちどり

羊
猫
蓬
鞄
ひよこ
雪
蛍
雪



こてい　特牛（コウトイ）

草木



時候

衣服

肩衣

起こりは不詳　後世の事也

衣のようなものに袖のつく称呼ありけりと

よりて後世の事なるべし

袖なきをよしとす者もの云の事や

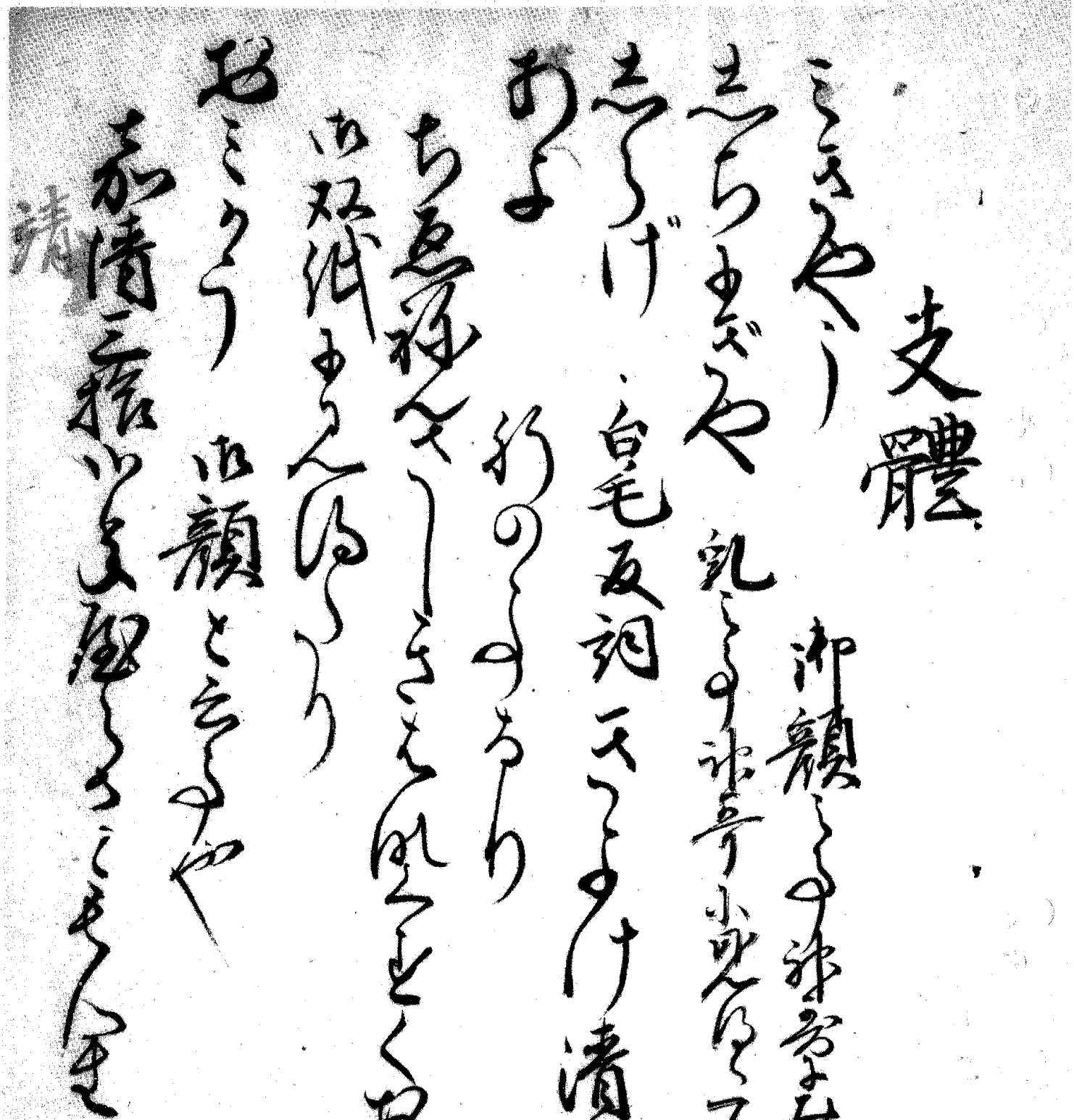
袖のみそありもの

ホコリ云々と云ふことを指すや

永禄三年やうやうこれを用ゆ

1951

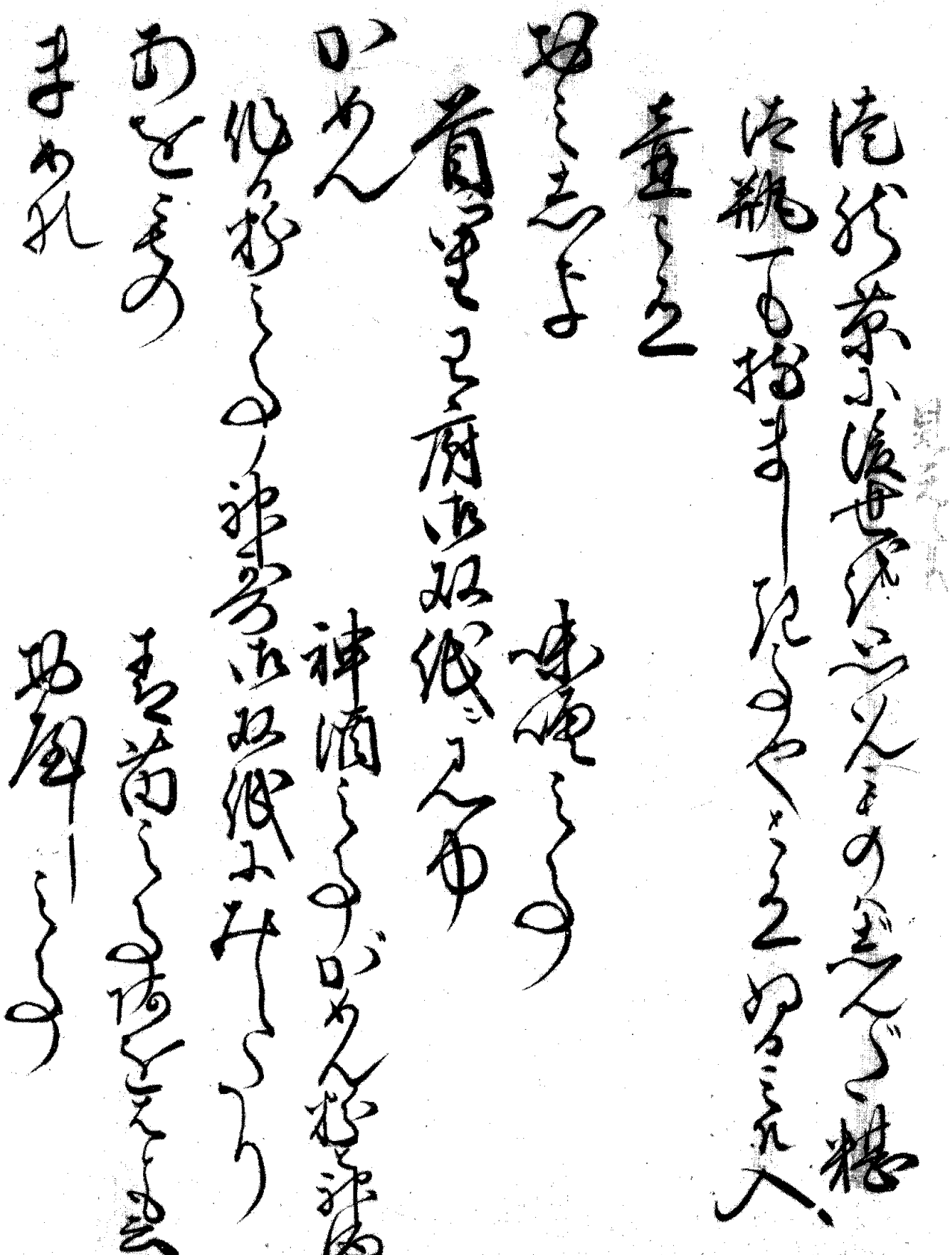
くさぐさの品々を世に出で給ふ
たれさへぞ　たれそそのもの
天皇二年、私恩となりて出で給ふ
ことのふり
ぬさ　衣ぬさをとる
ぬさ（タヌギ）　汗衣を道中受汗衫の衣ありと



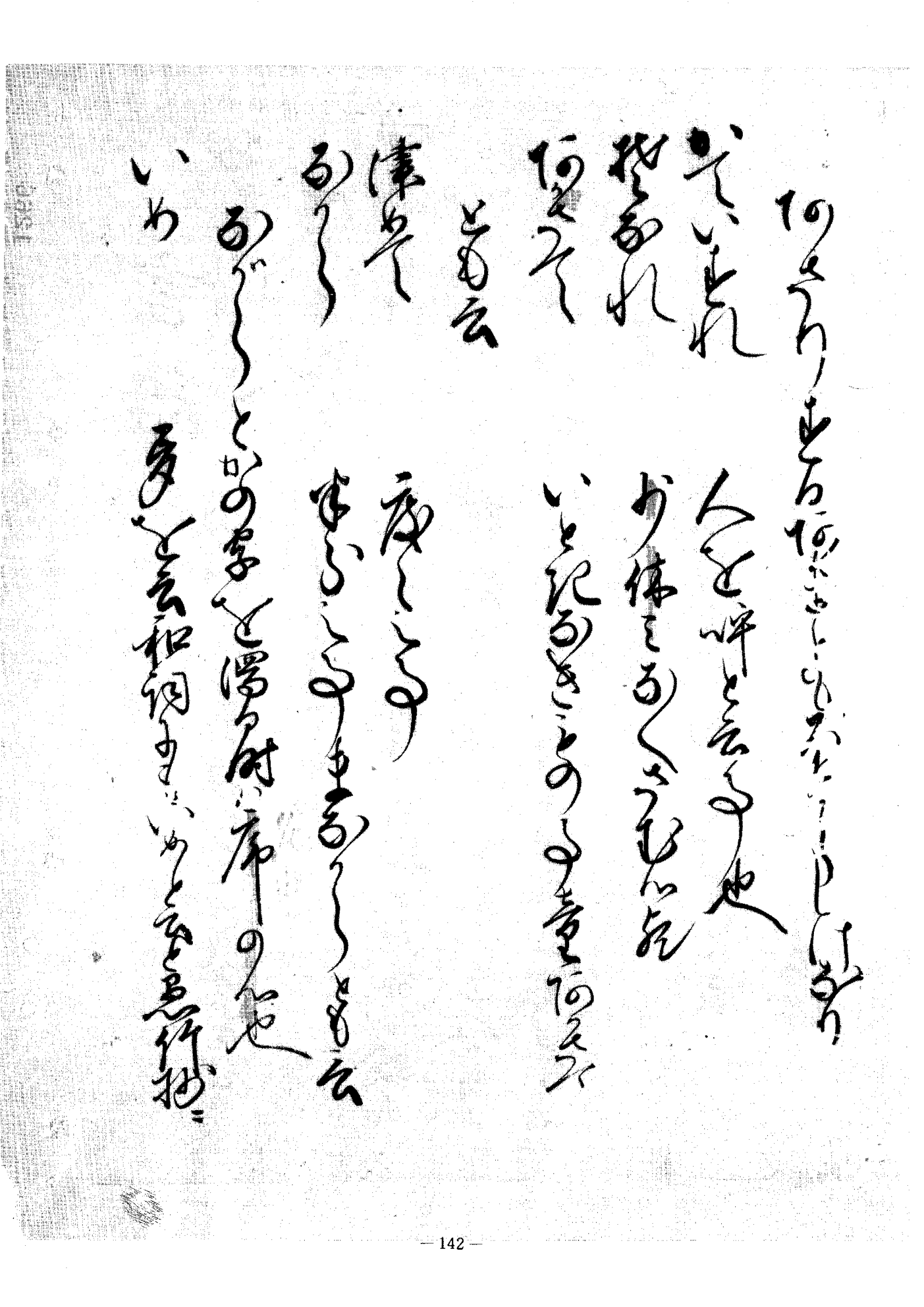
まりそうのぐんてる盆組
もんひろう

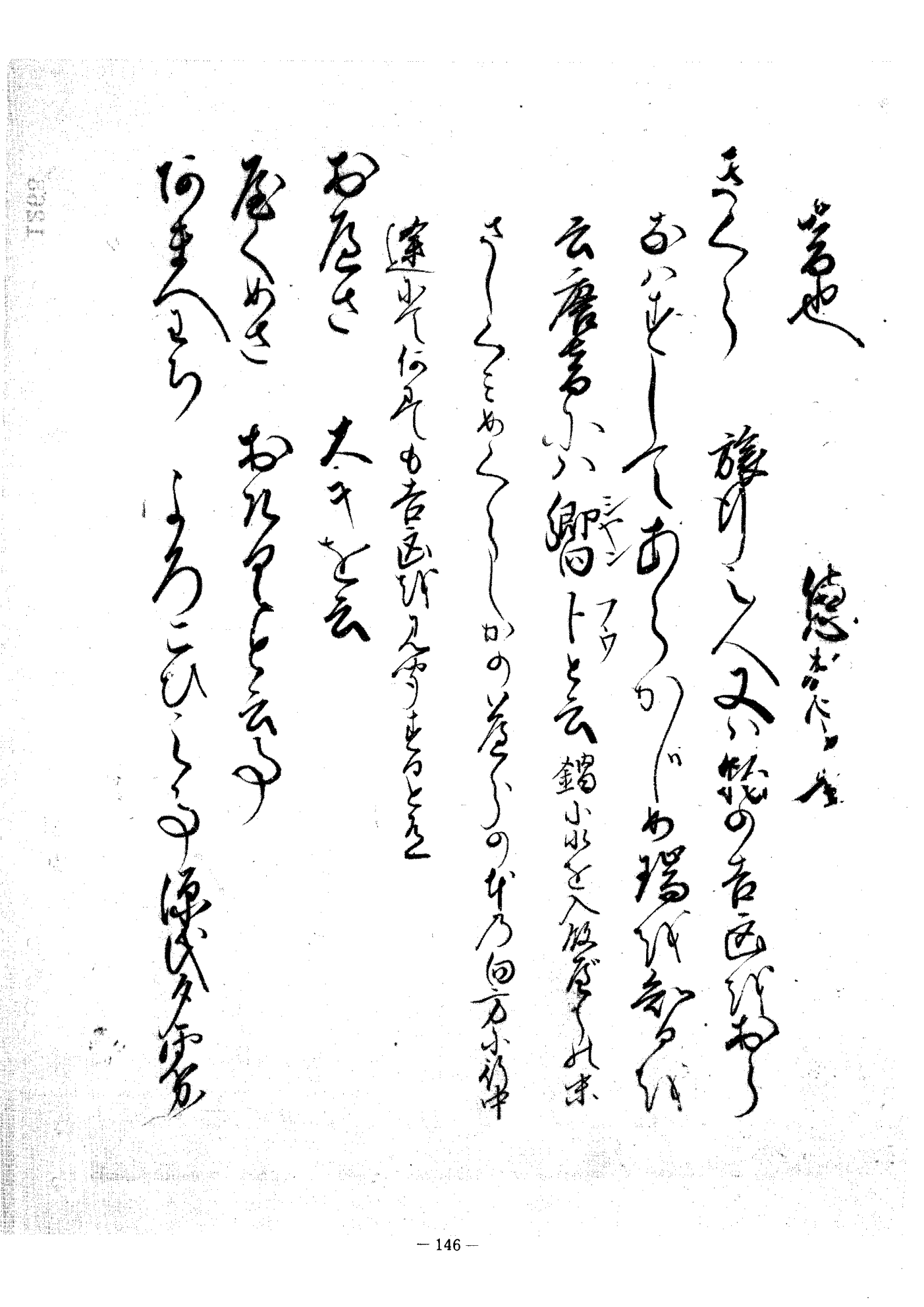
飲食

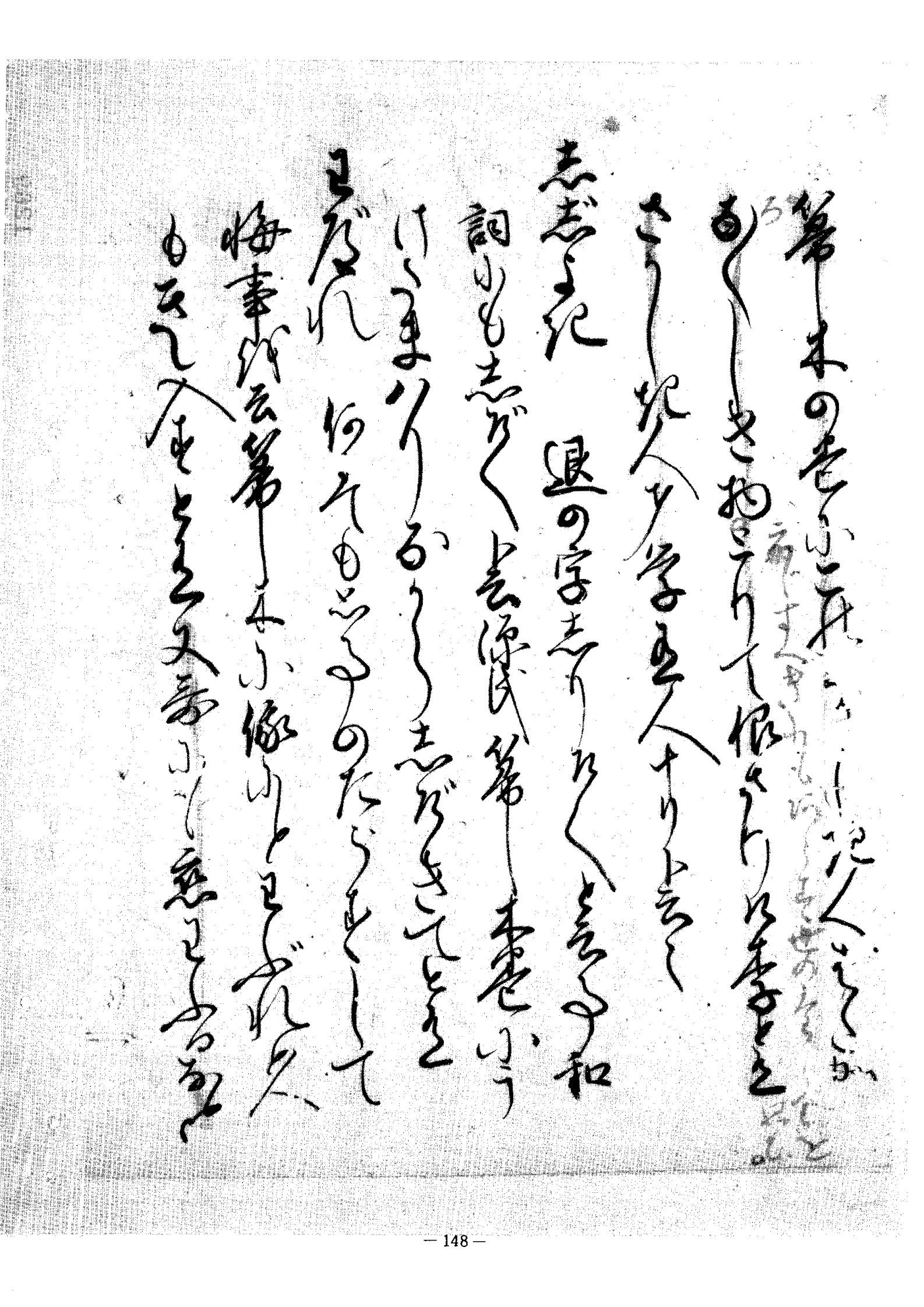
たべる
たべる
のむ
ねる
ねる
おきる
さむい
あつい
すずしい
あたたかい
あたたかい
あたたか



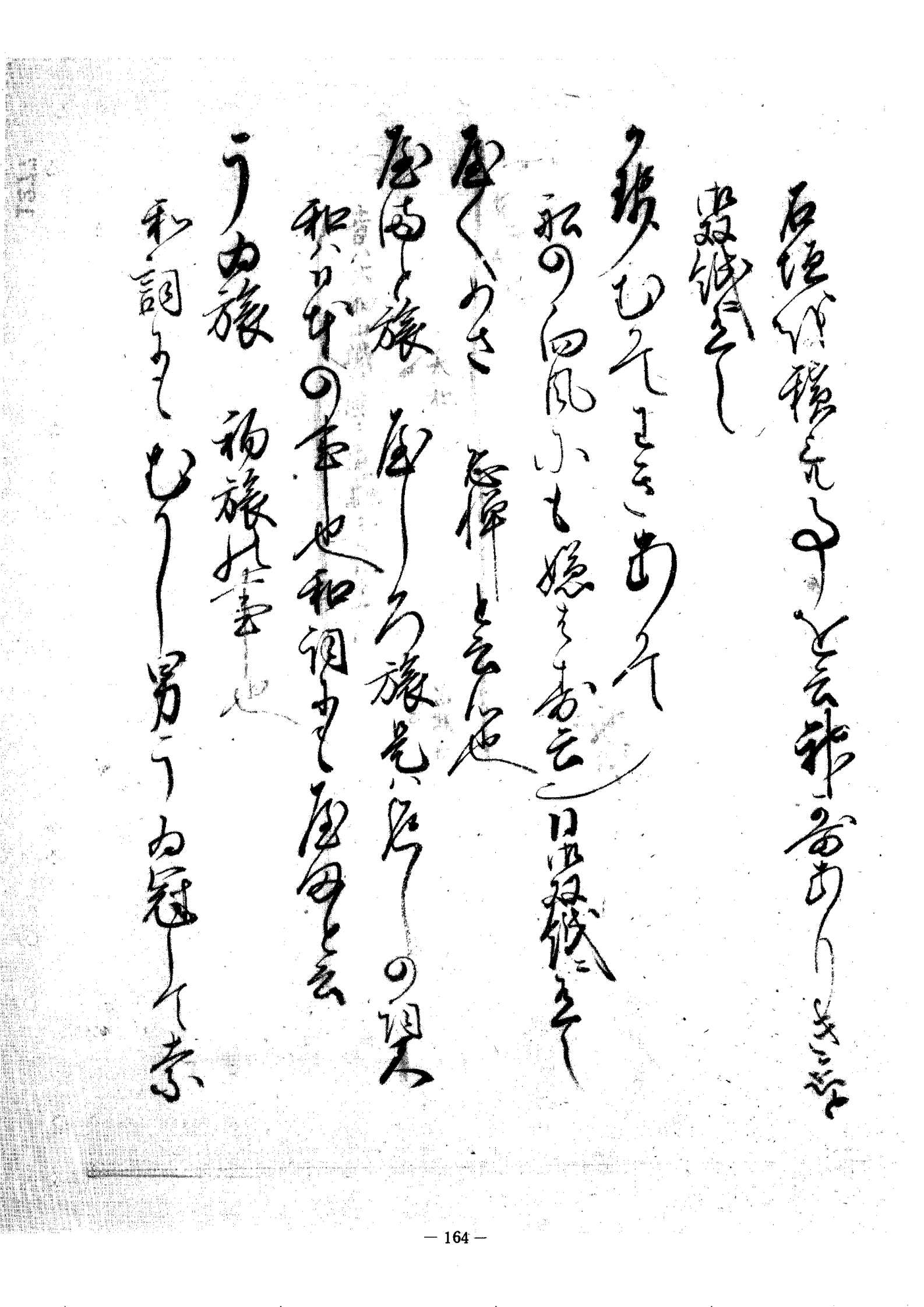
言語

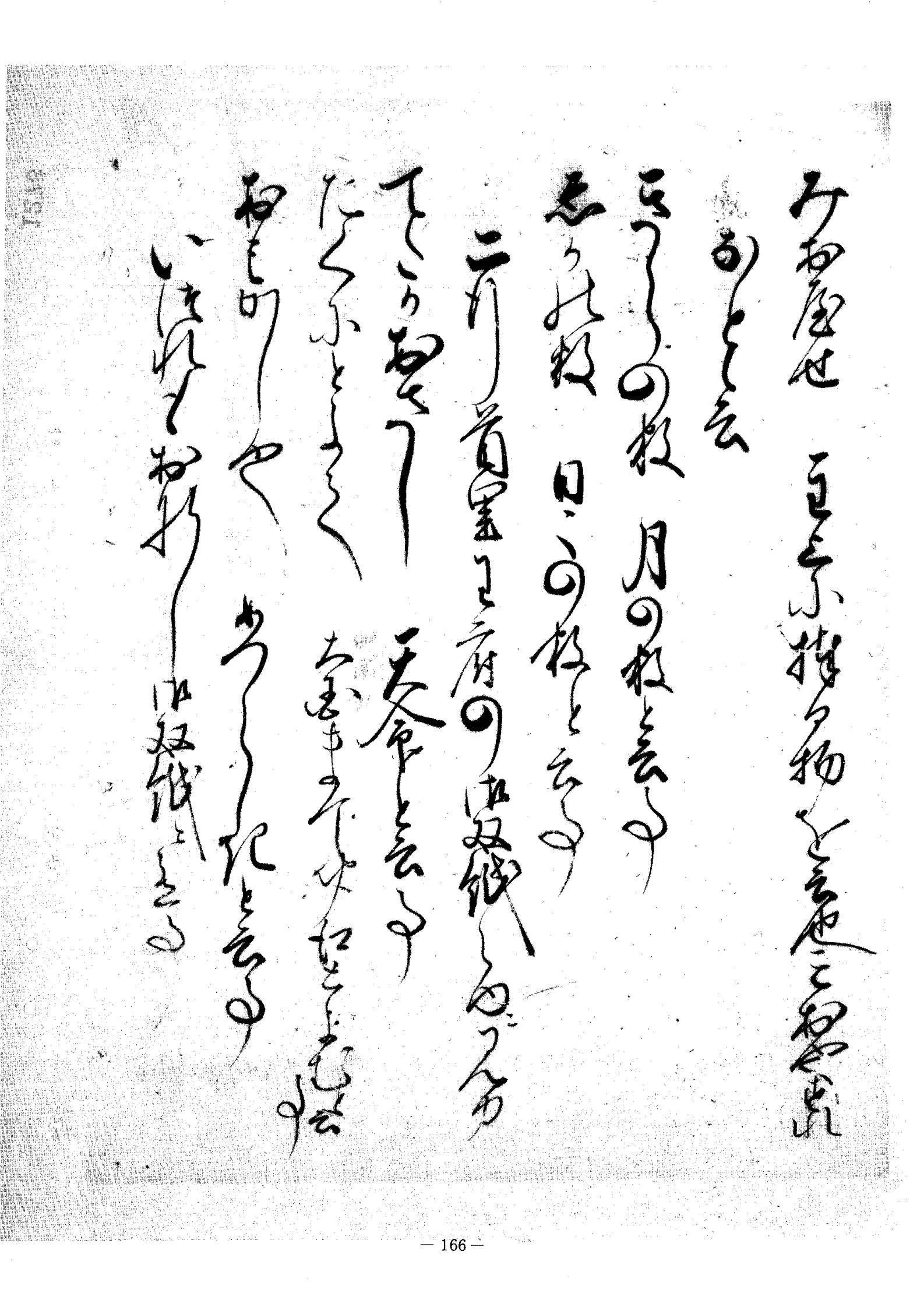


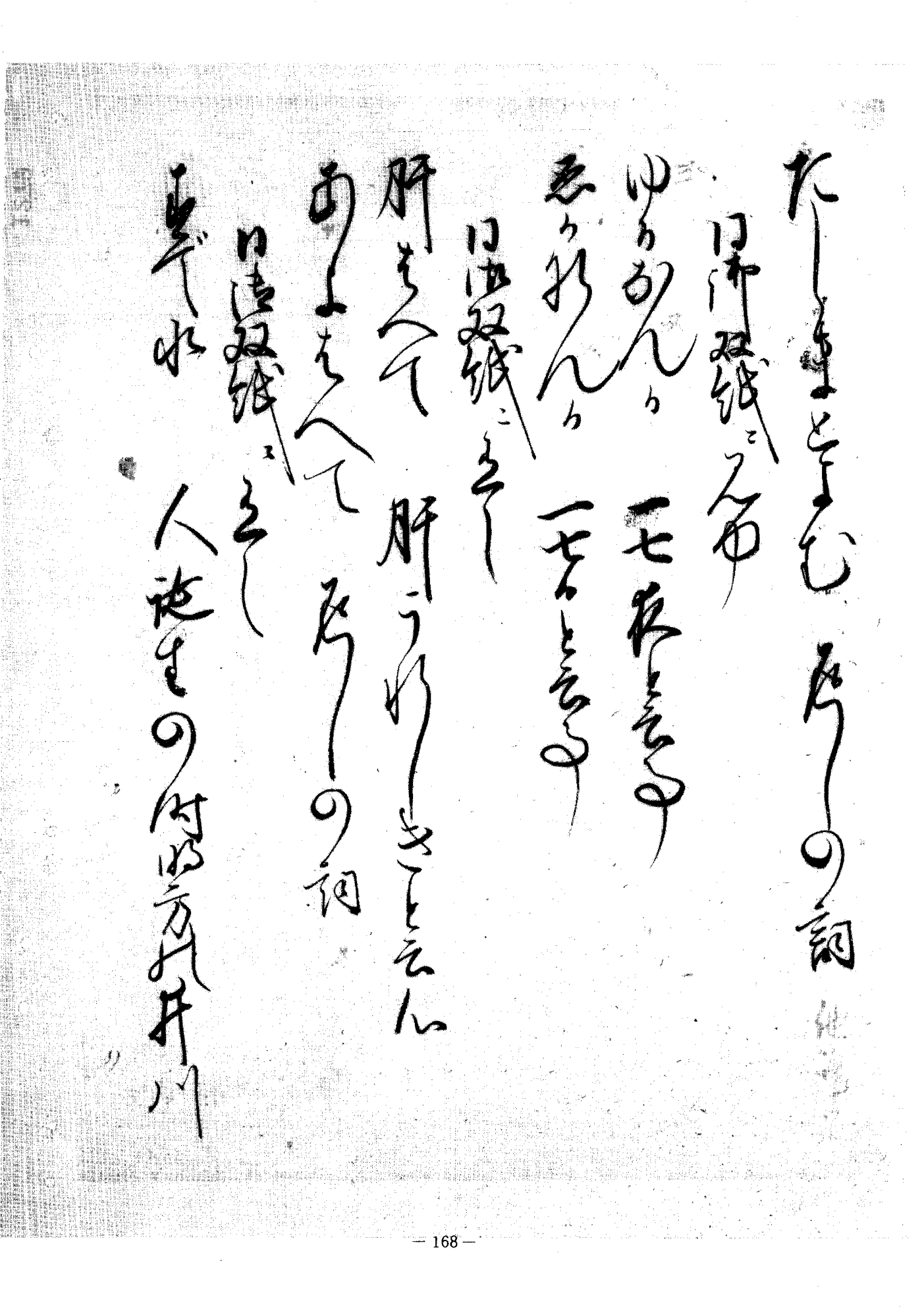


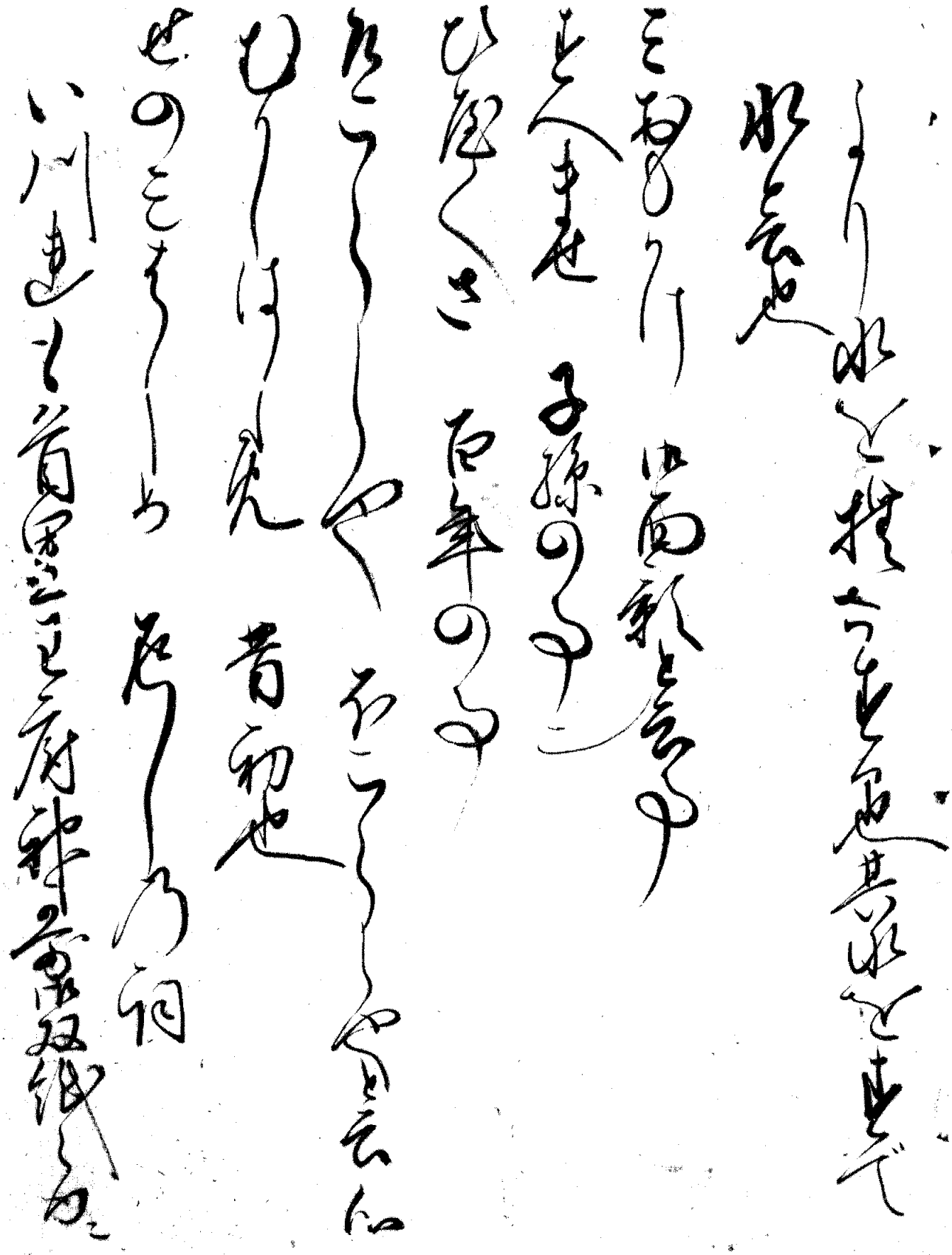


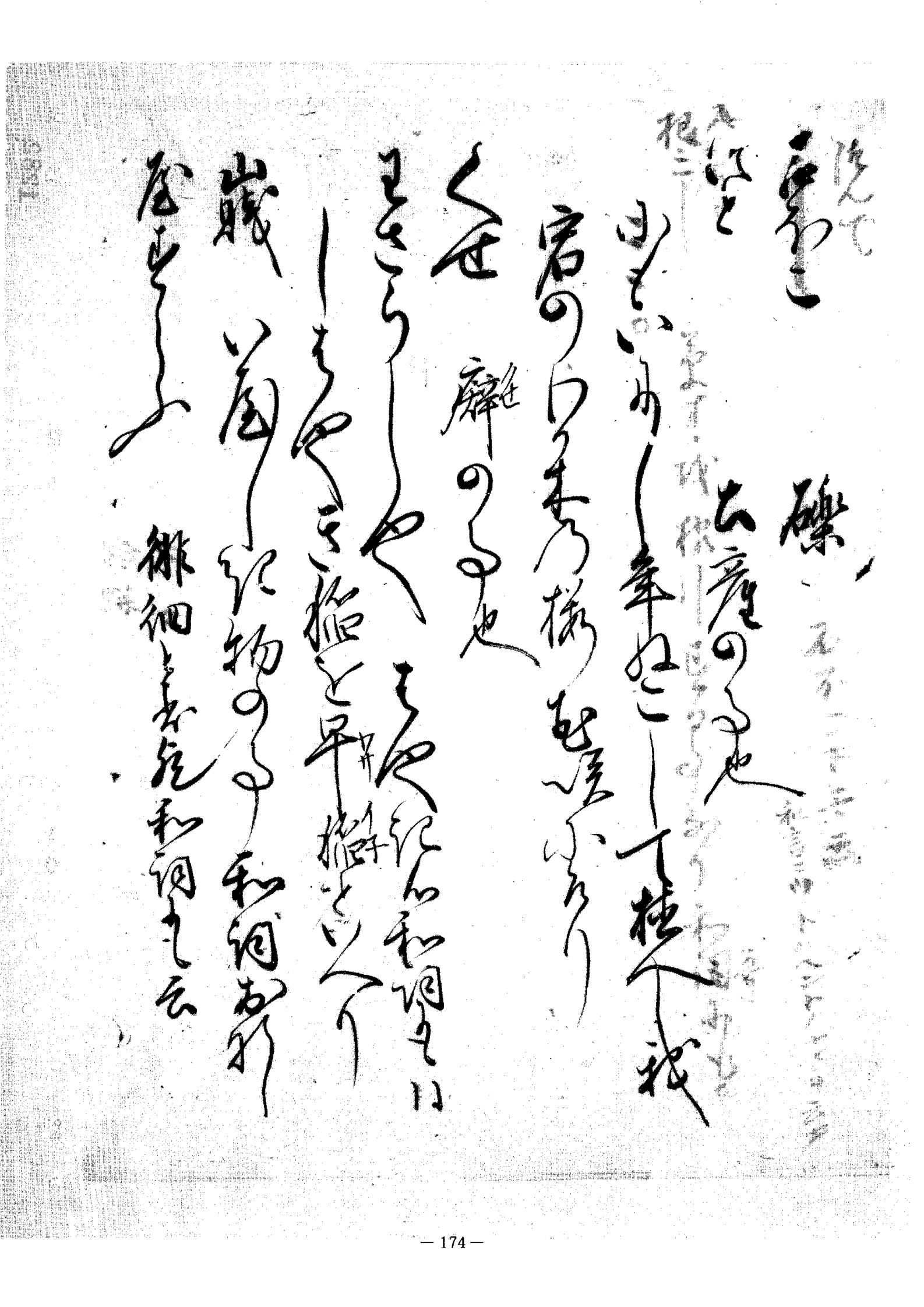
屋根の葺
ひき葺
き葺のうへ」に杮葺こゝろ
けものの
けものの巻ふ
とりの曙のうへ」に杮葺こゝろ
ありく
てこゝろある
東北葺」に杮葺こゝろ

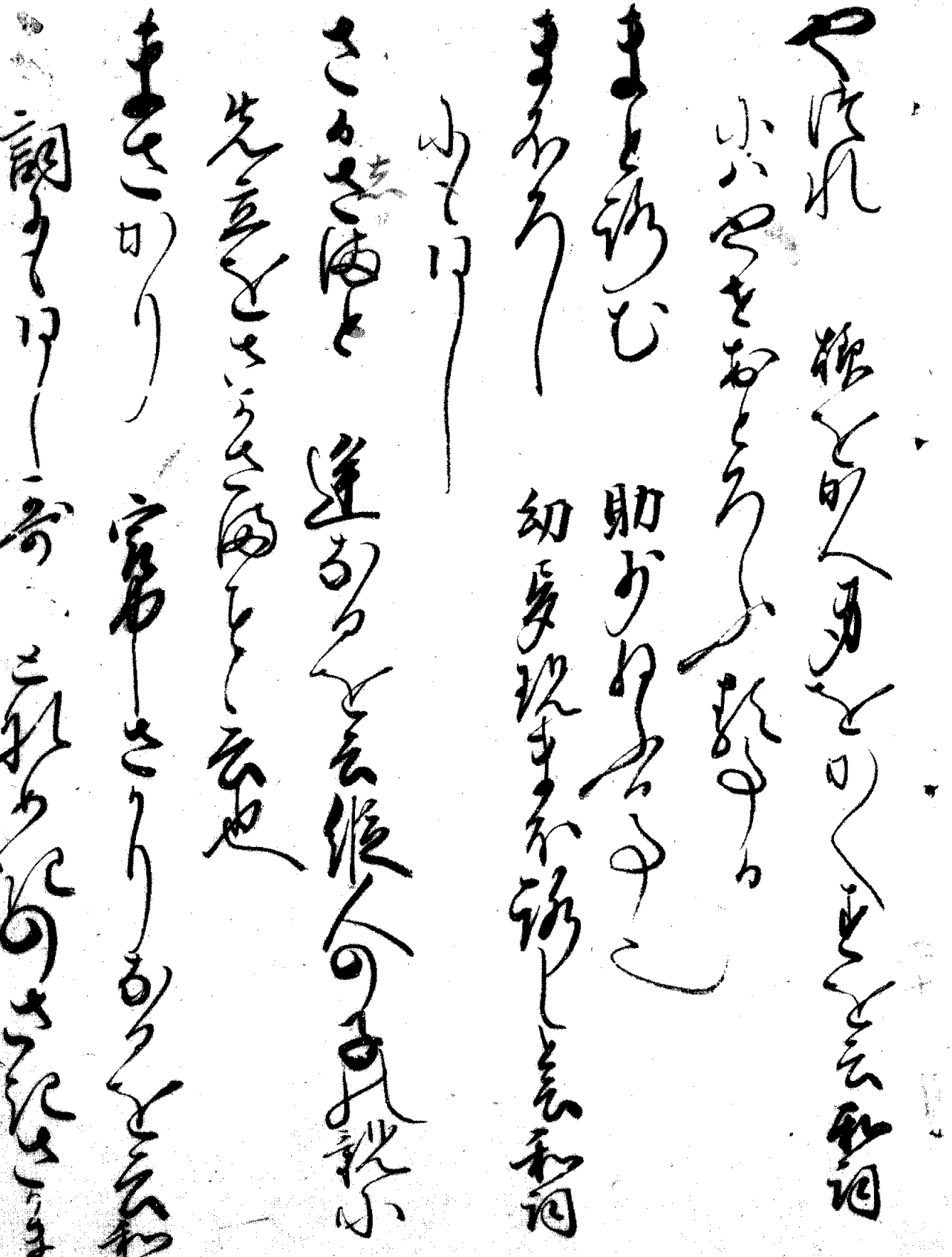


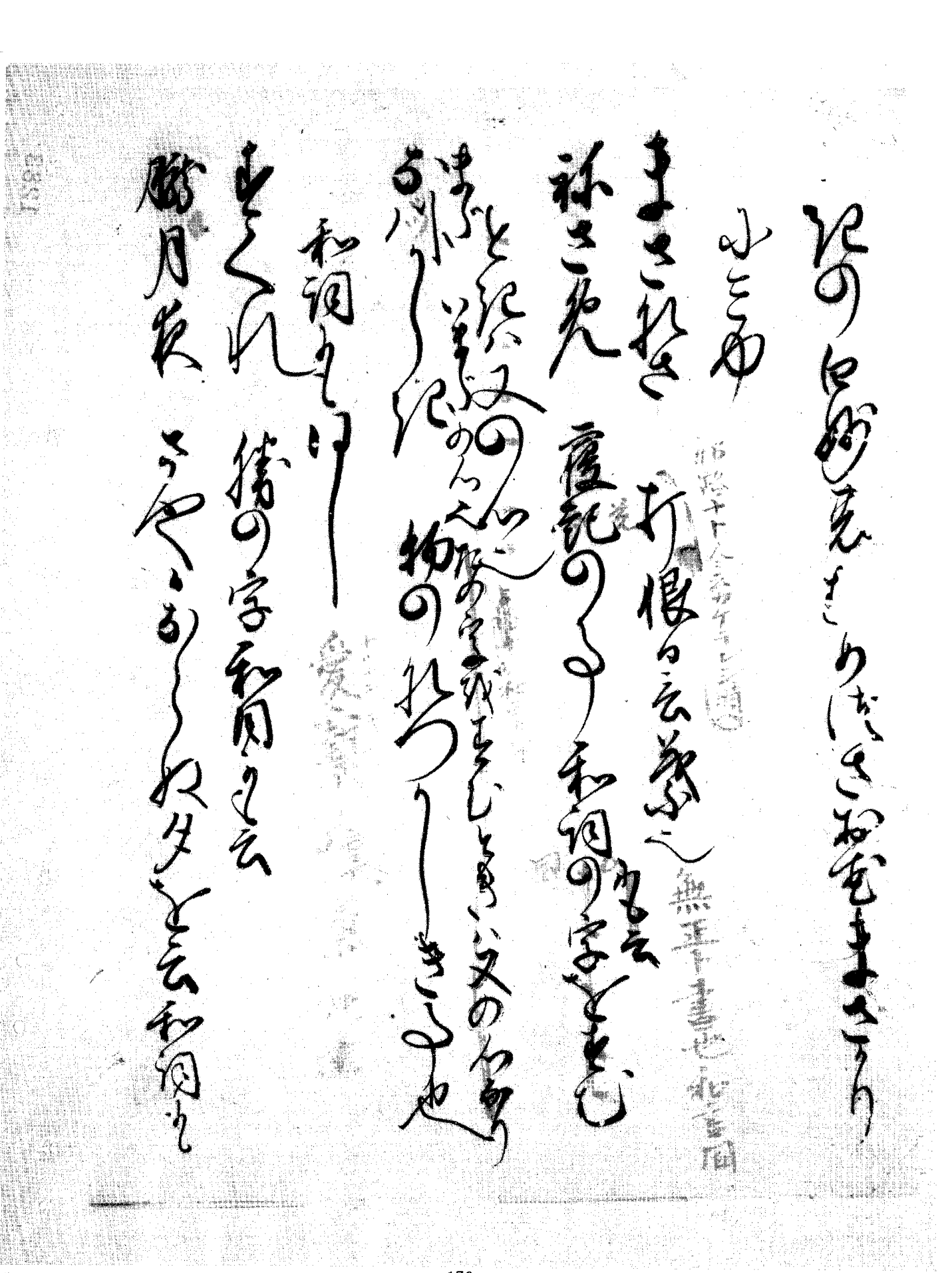






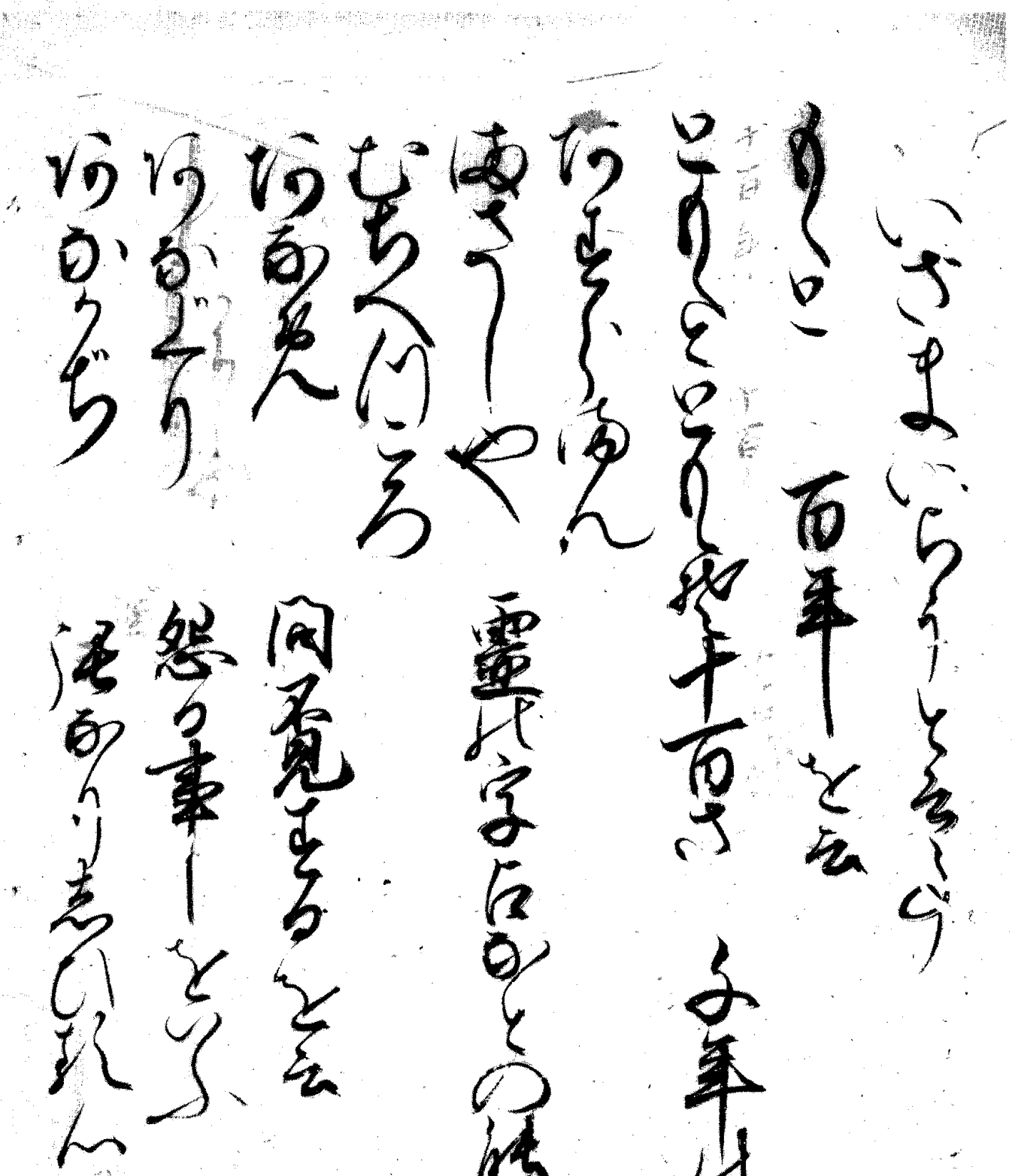


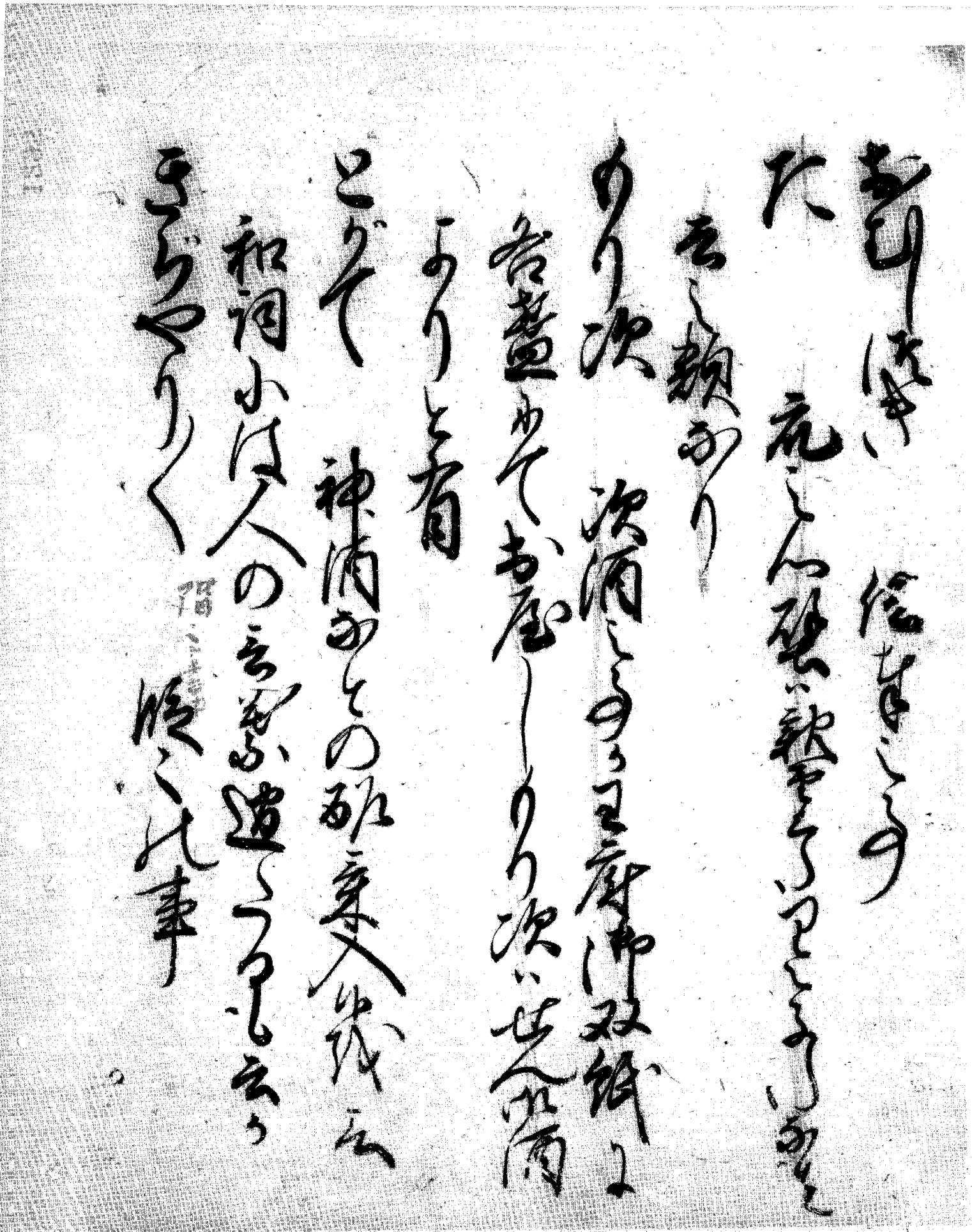


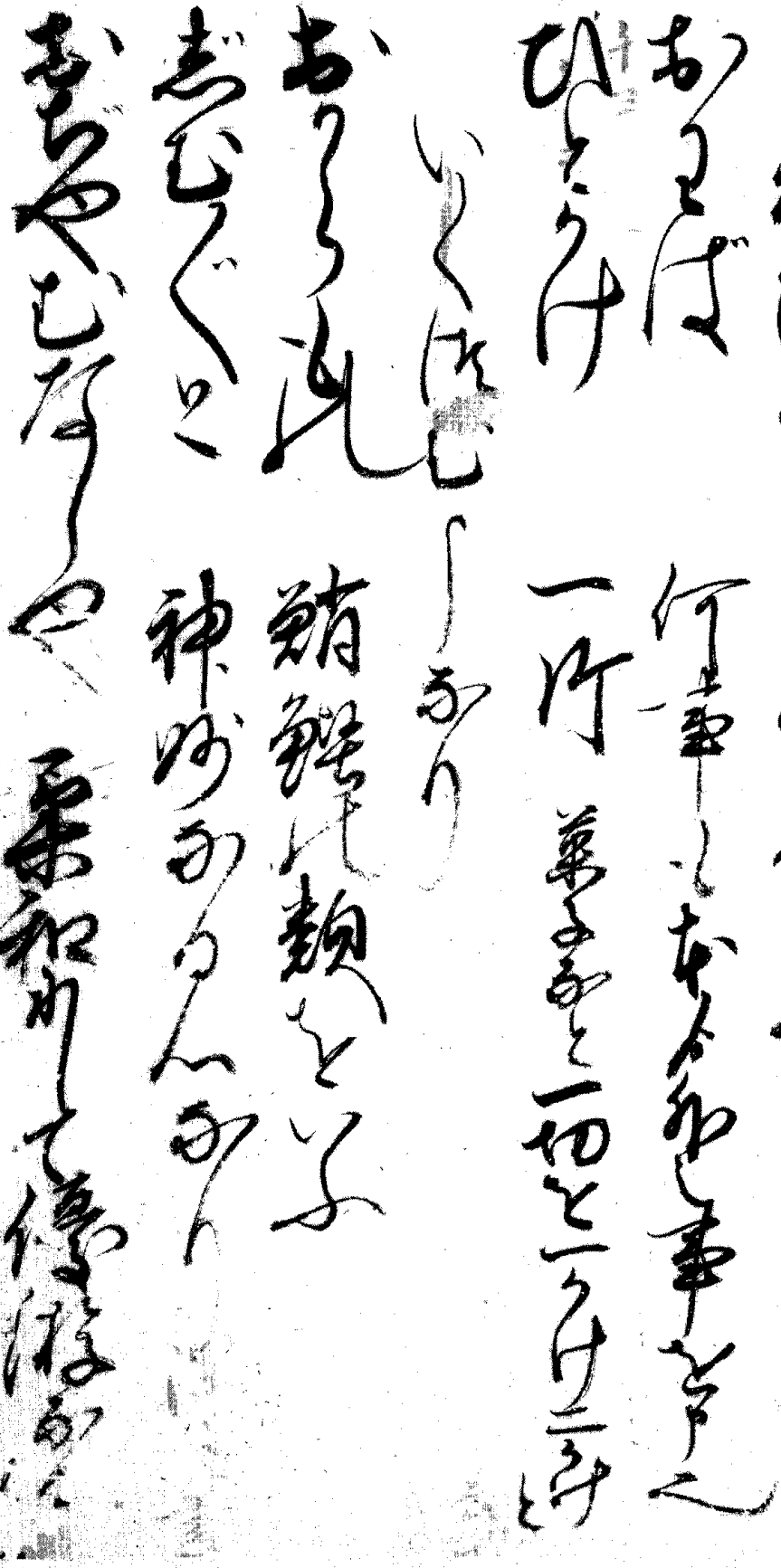


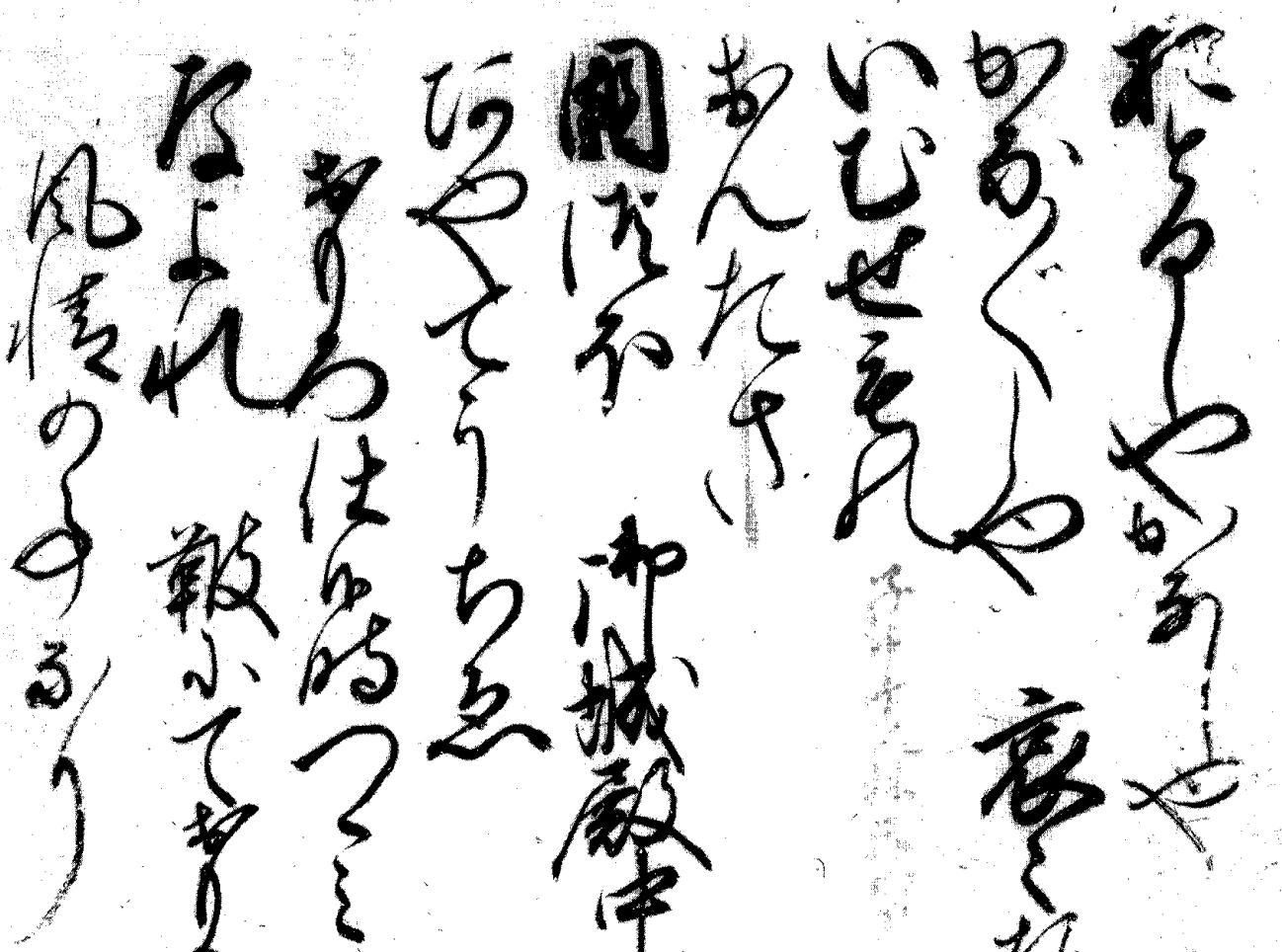
自然とおり船梅薄うと云
ごまんとい 周章まうくる(ママ)の膝(ママ)
ぬるとそれ 宛特とするのおり尊王
亜走多顔嬪と云ひ
ほいその 金玉又正亜あるものと云ひ
十やや
おやれ たよれのおりた様とお
ちよすのり そりてむそいふ宿りなう
もやけ 御剃とおいのおり

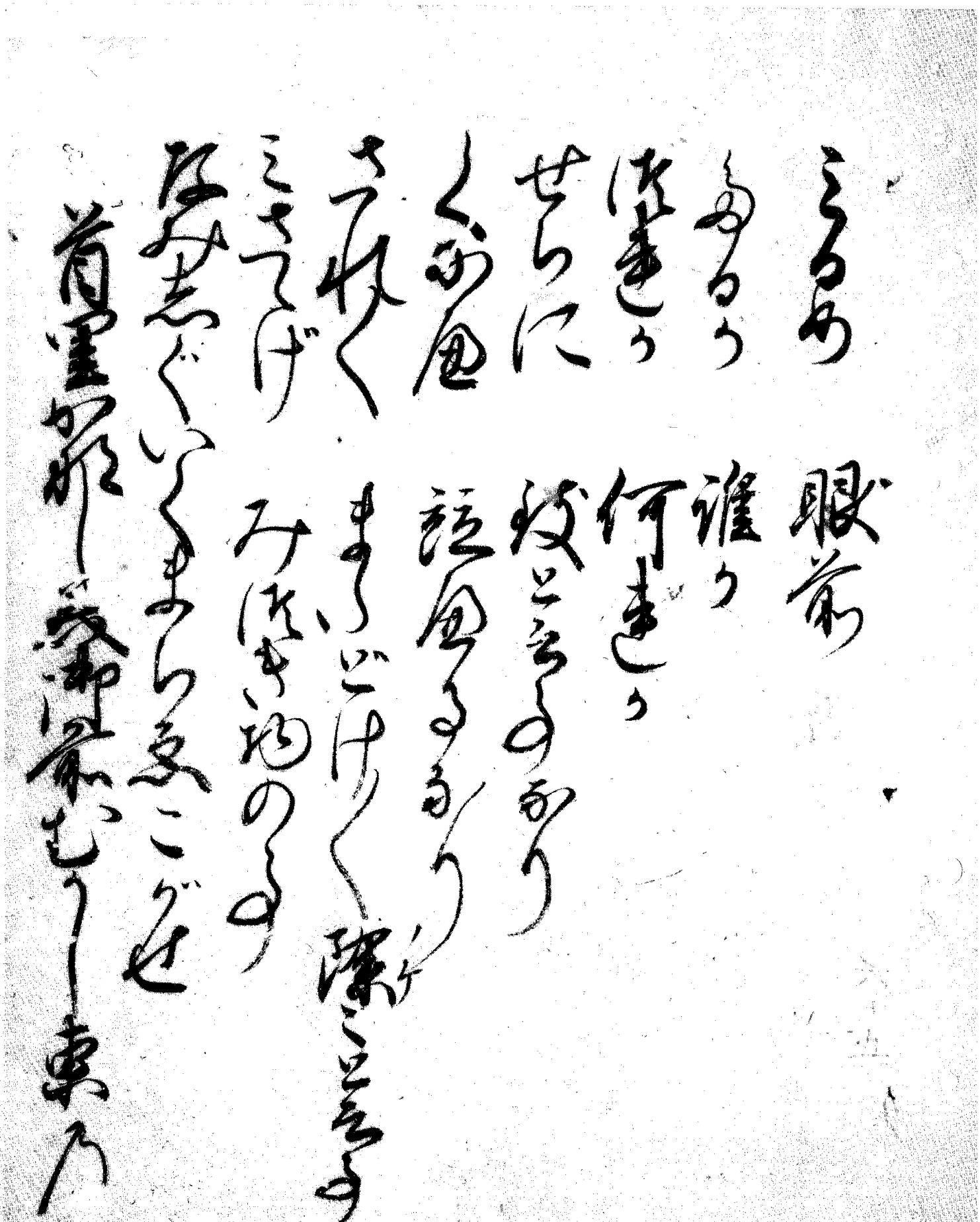
いやしく・・・れんれんとして
りょうぜんとして　冥加有るの
さいわい
幸いこれ　夜うこのうち
いやうるわい　日南小田と云春九日の
夜小雨ふりそめ　翌朝迄降りつゞきて
ありがたき　寝覚えん事　和漢
あとさきより云
ともふく　平安ともふく

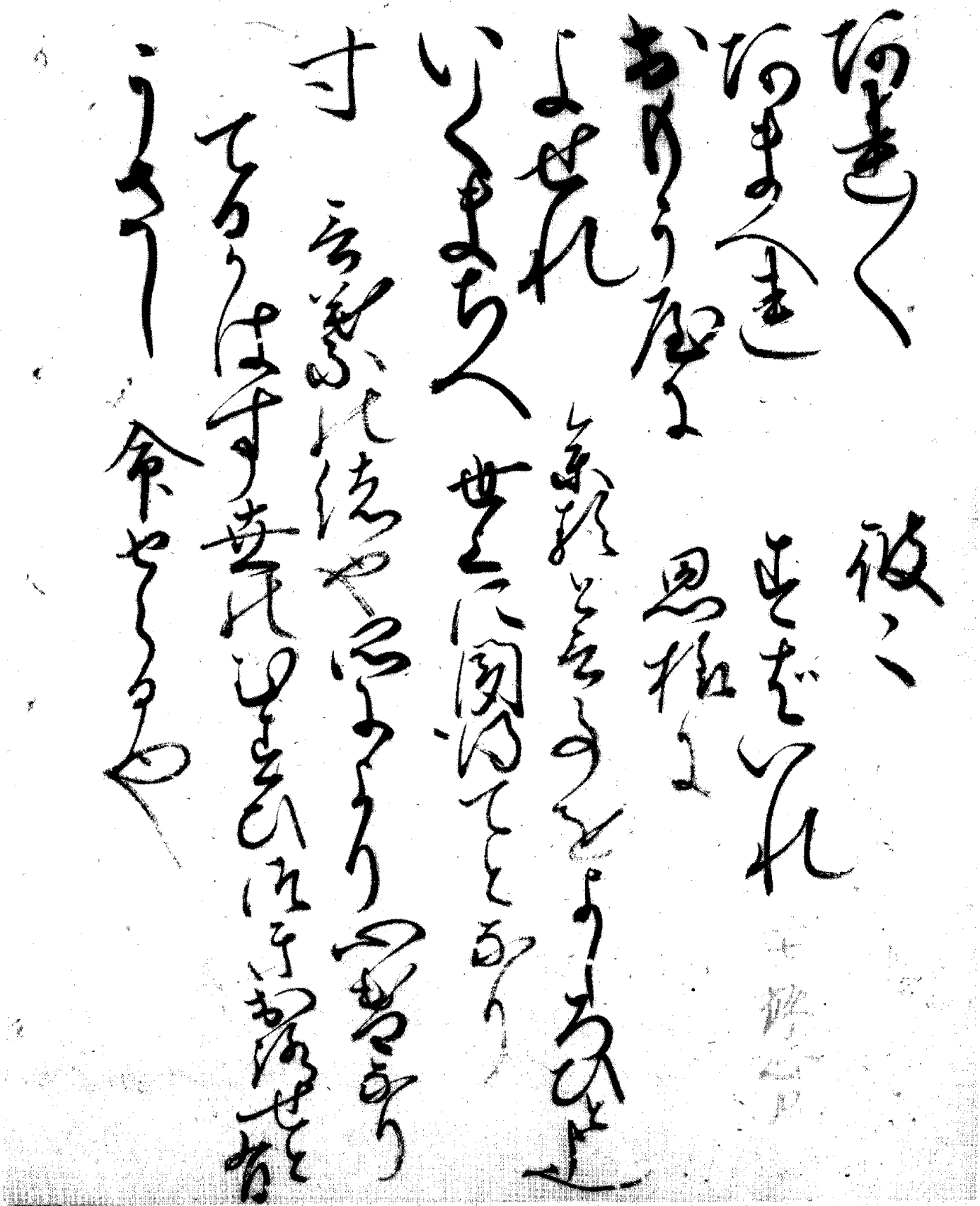


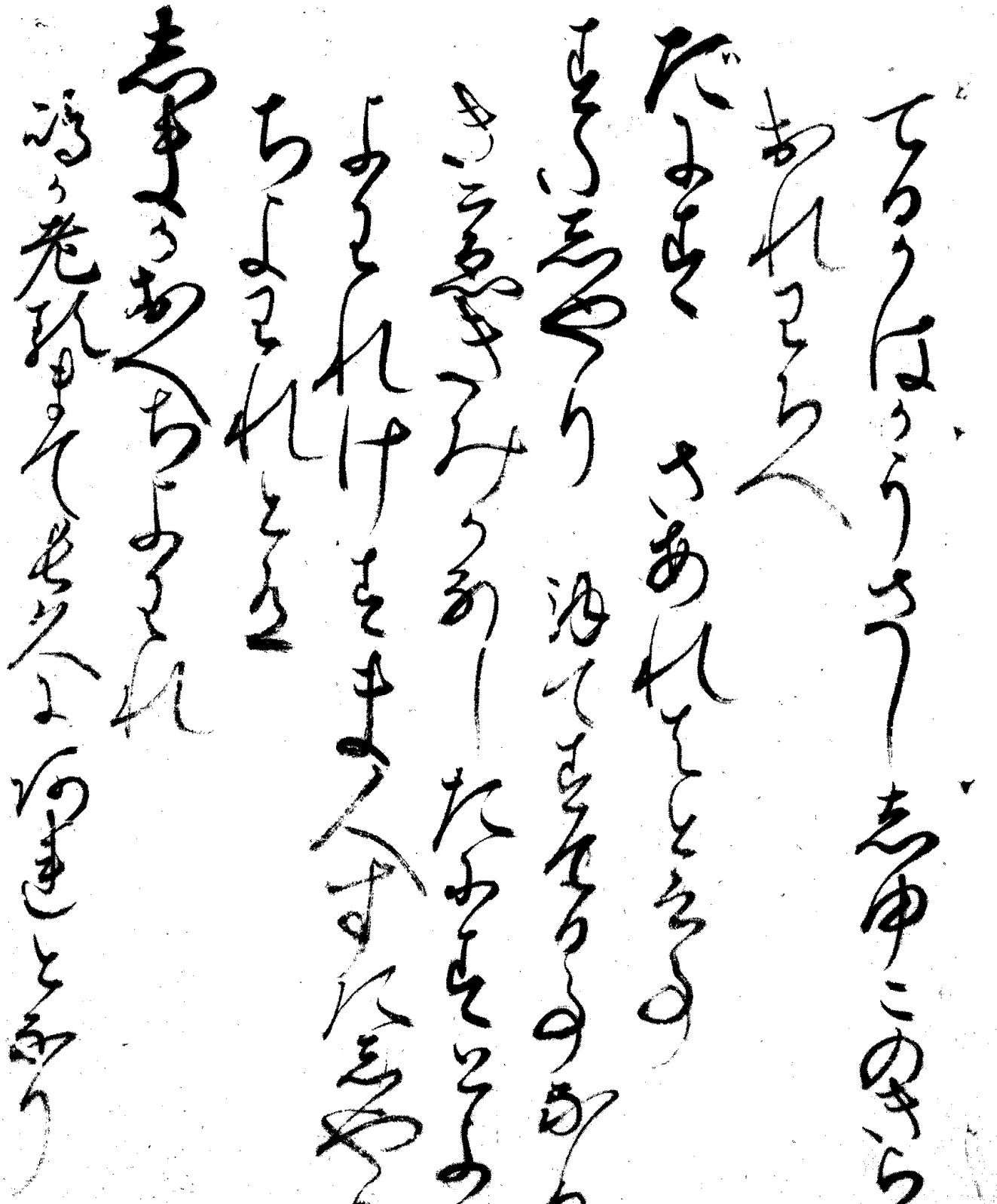




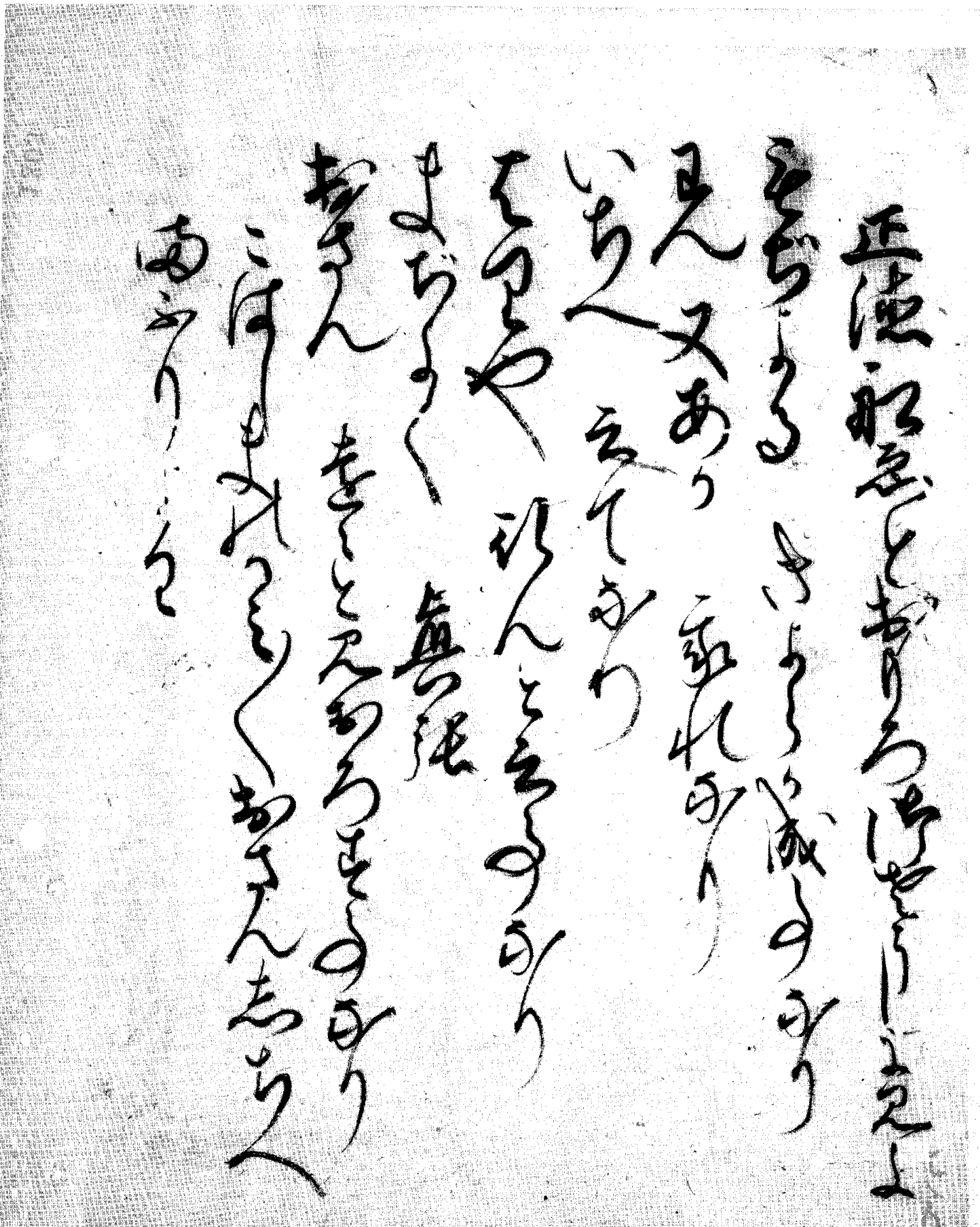


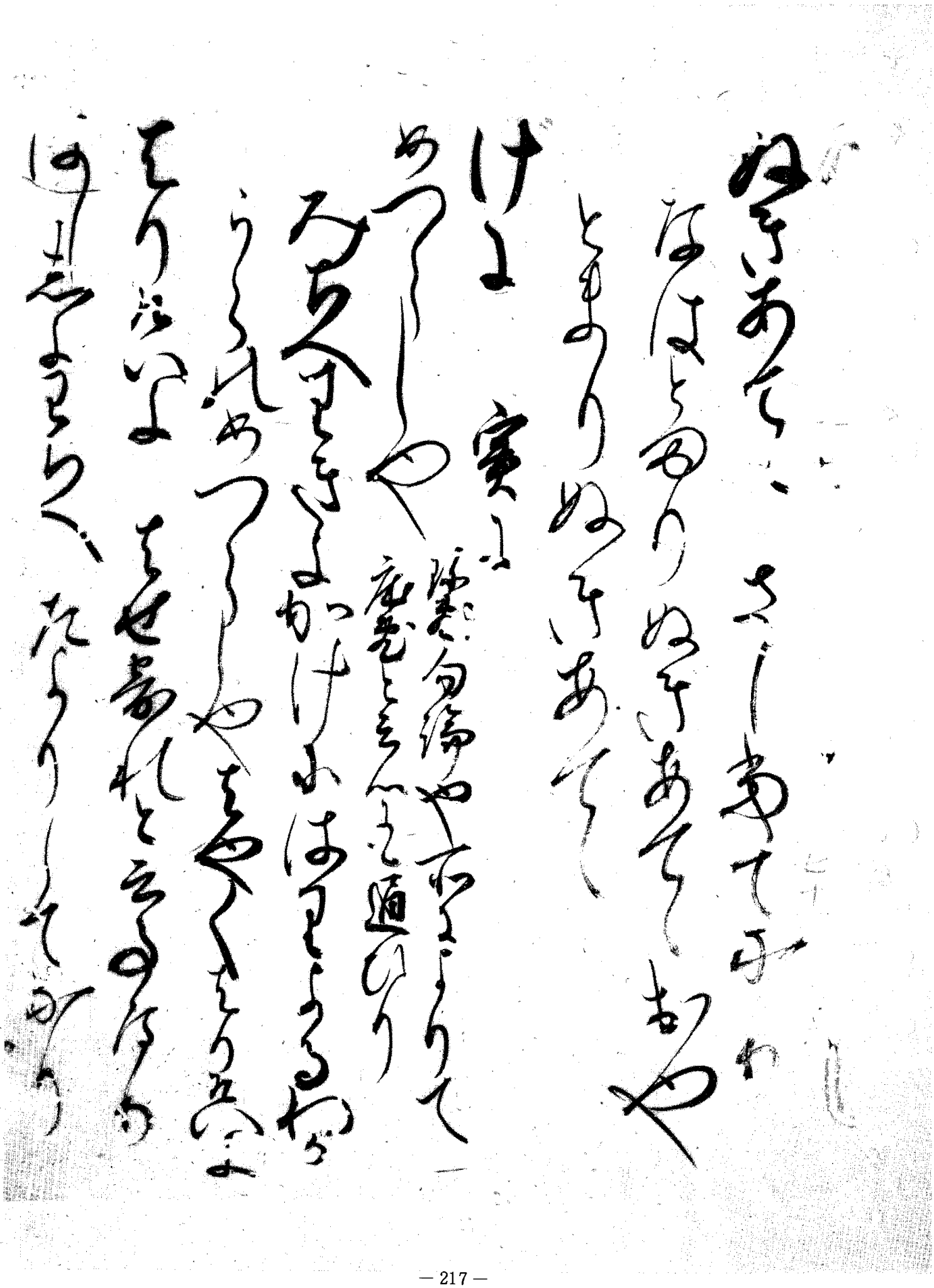


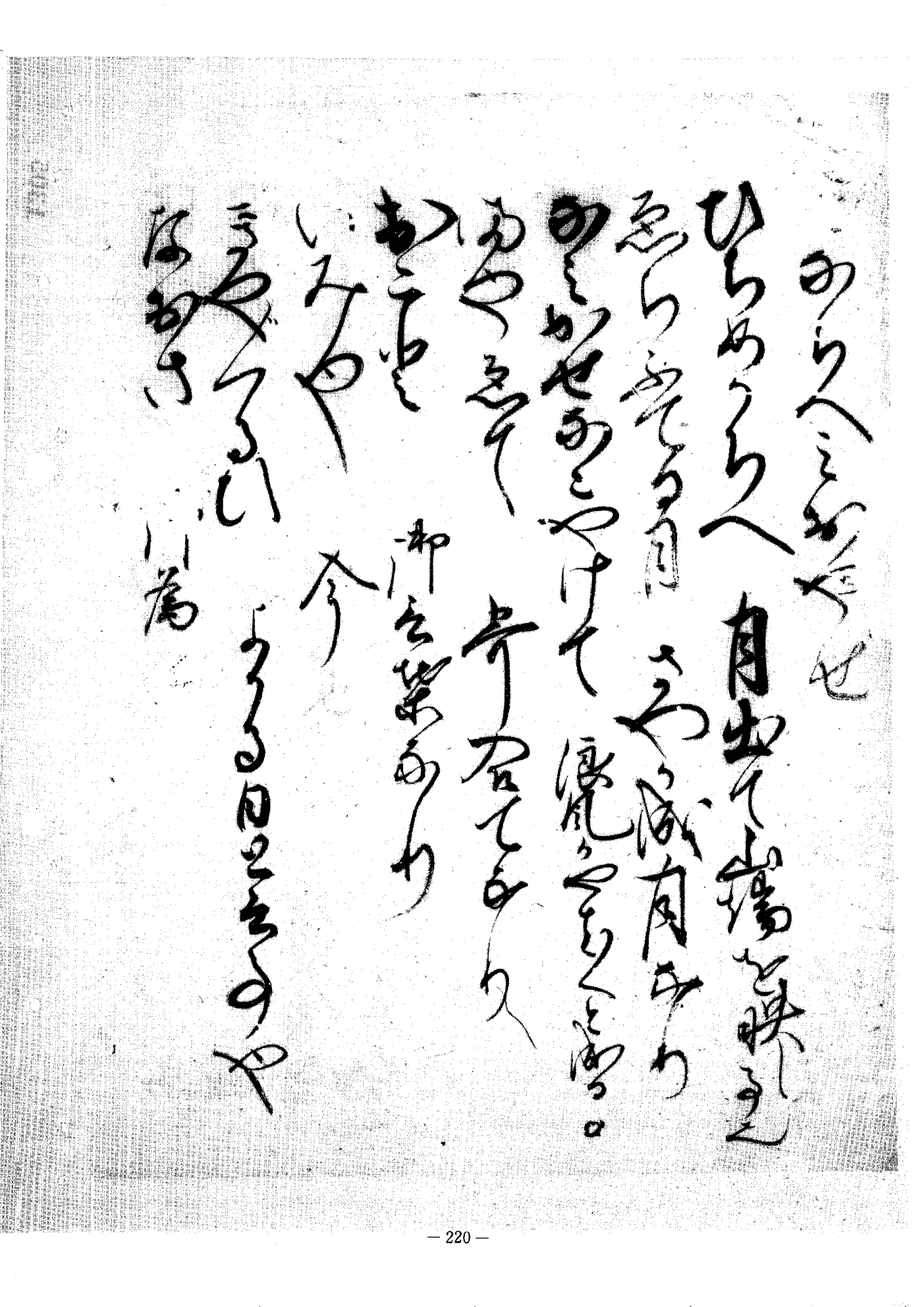


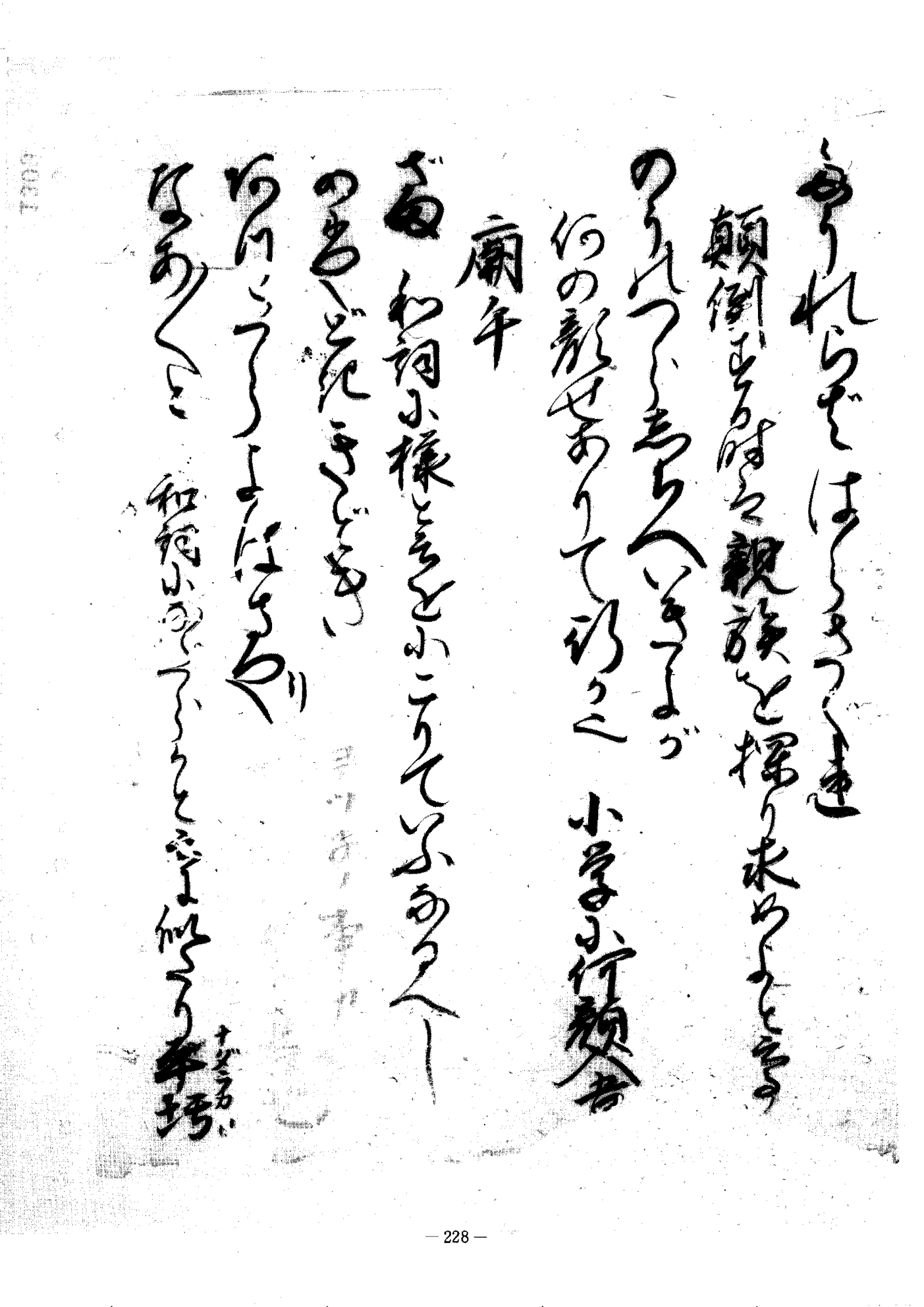


あ〜ちこちちよとれ
たれ　実ノ滅とうう
これとたよれまてて
かの〜や　親〜愛ふるもの
よたちから　震覚ちまるもの
あさにて〜　平気う
よりとう〜　夜入元れ
ちあて　合てすていとう
なよれ私はしるて

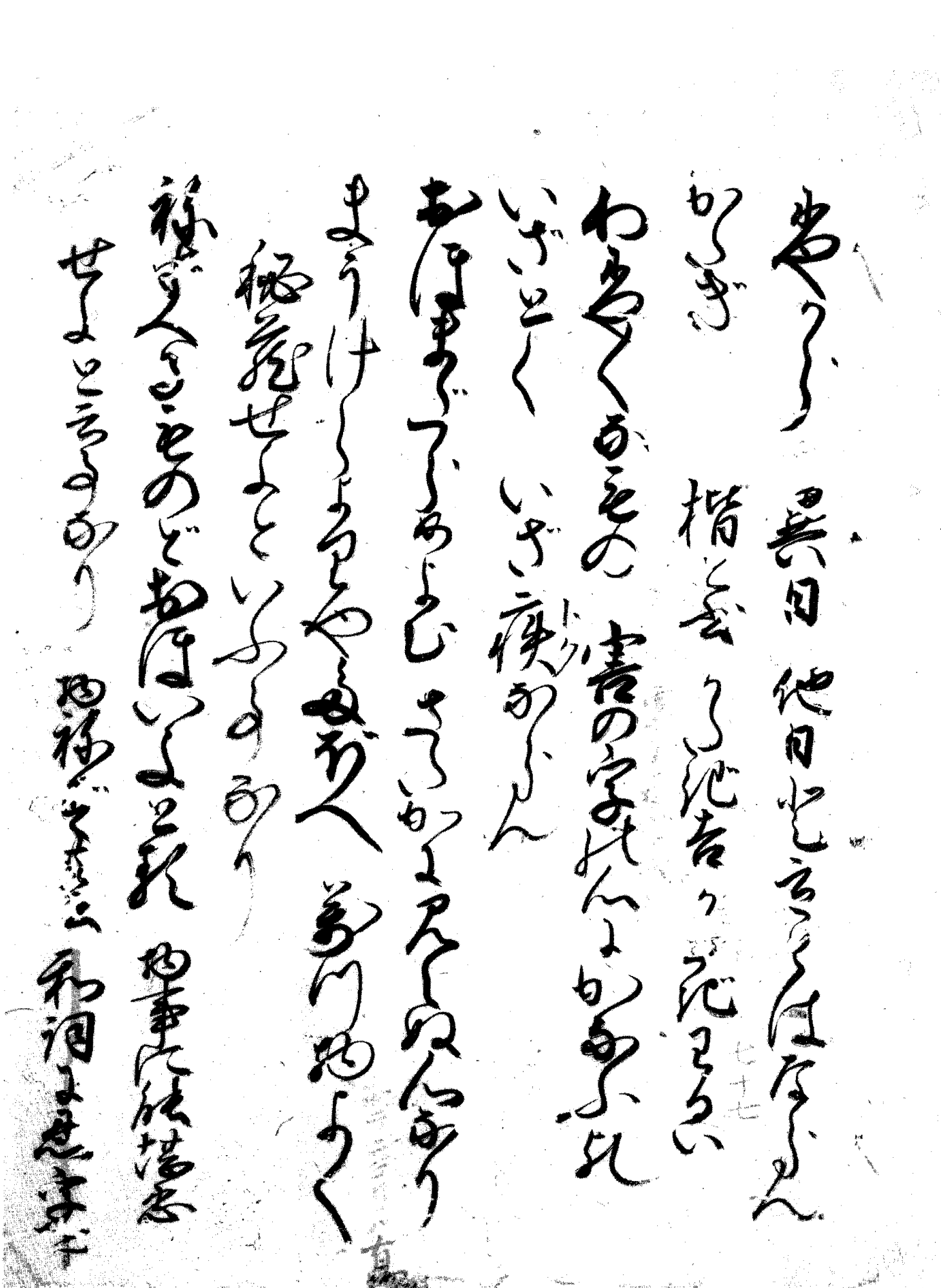


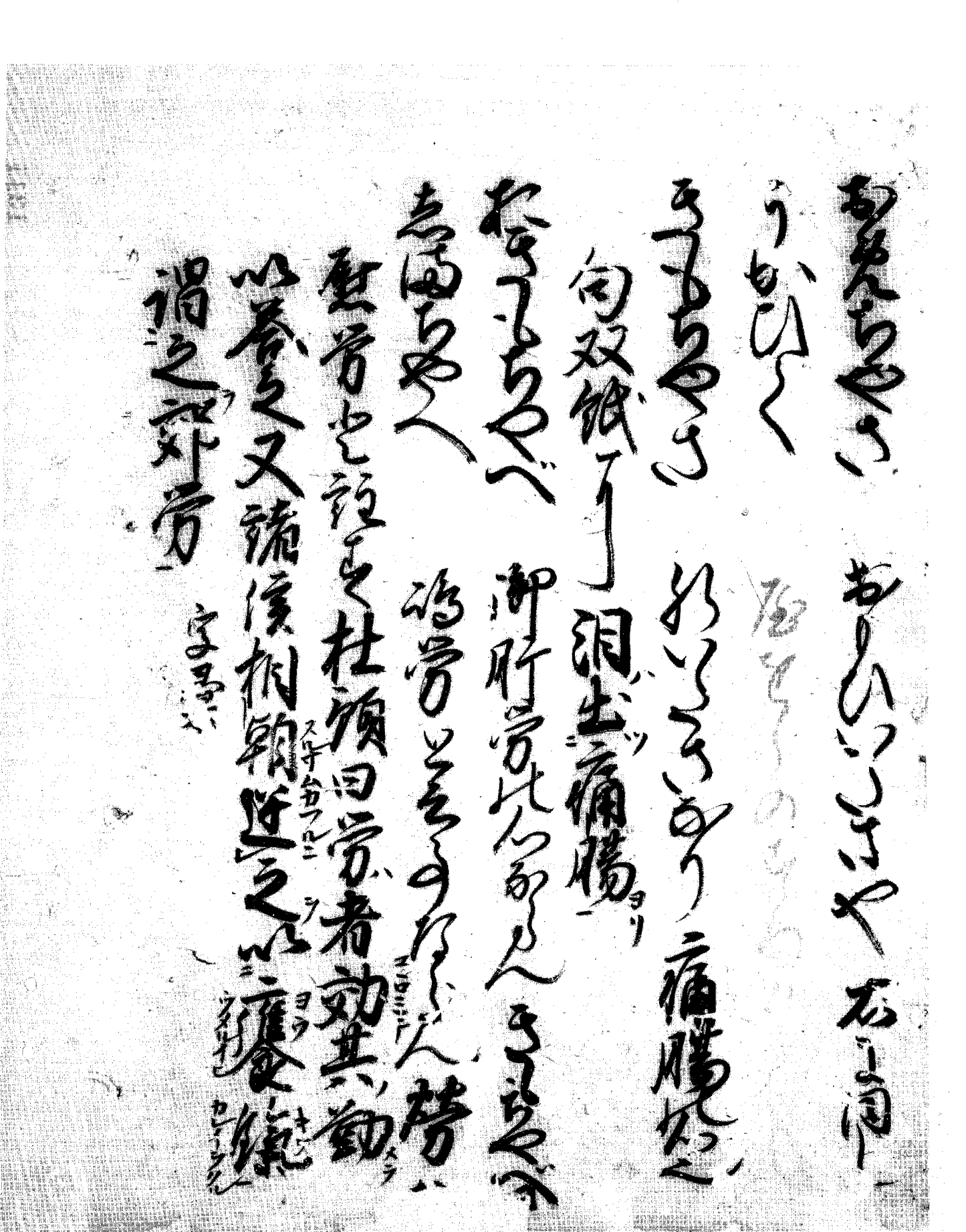




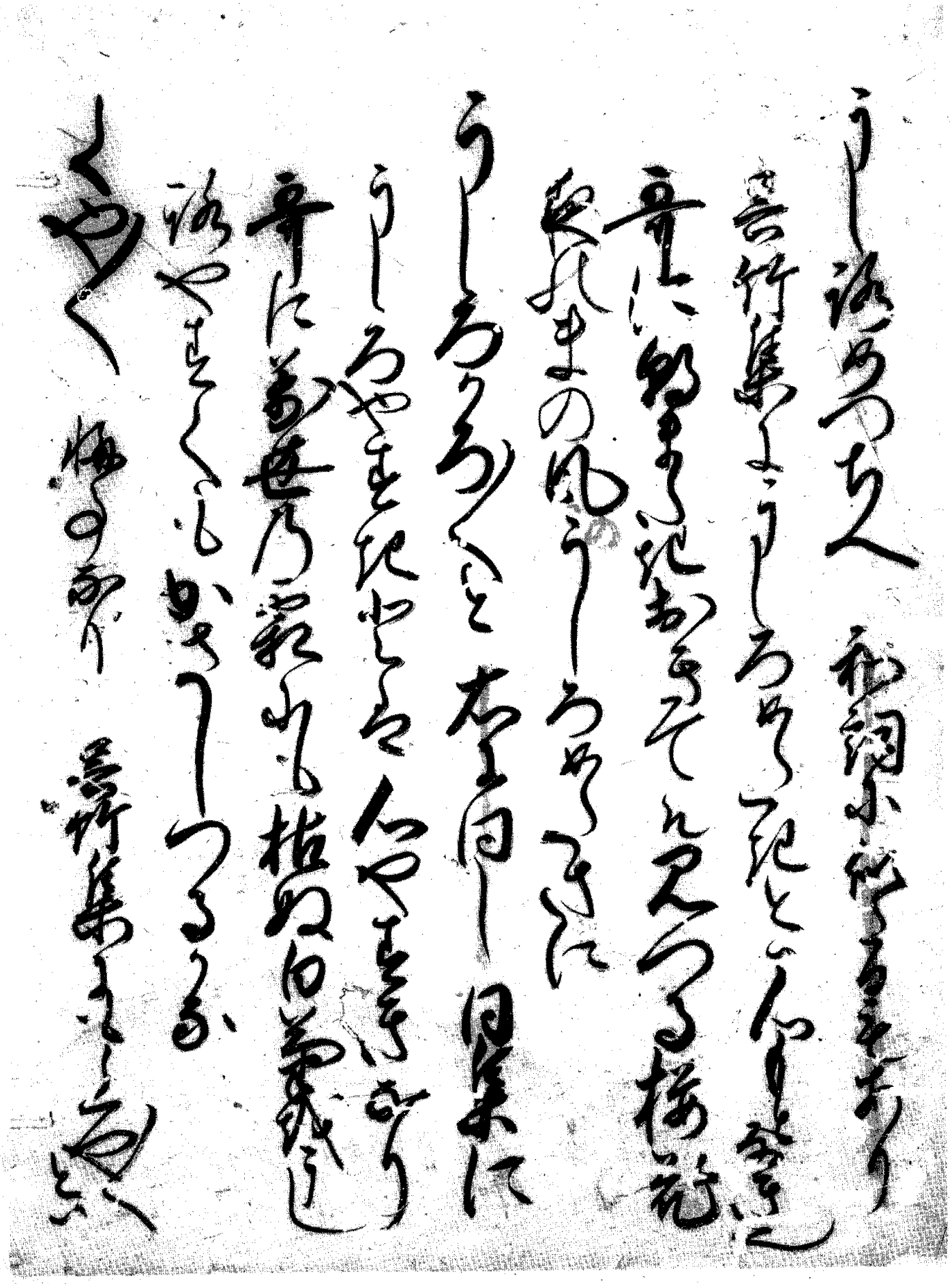


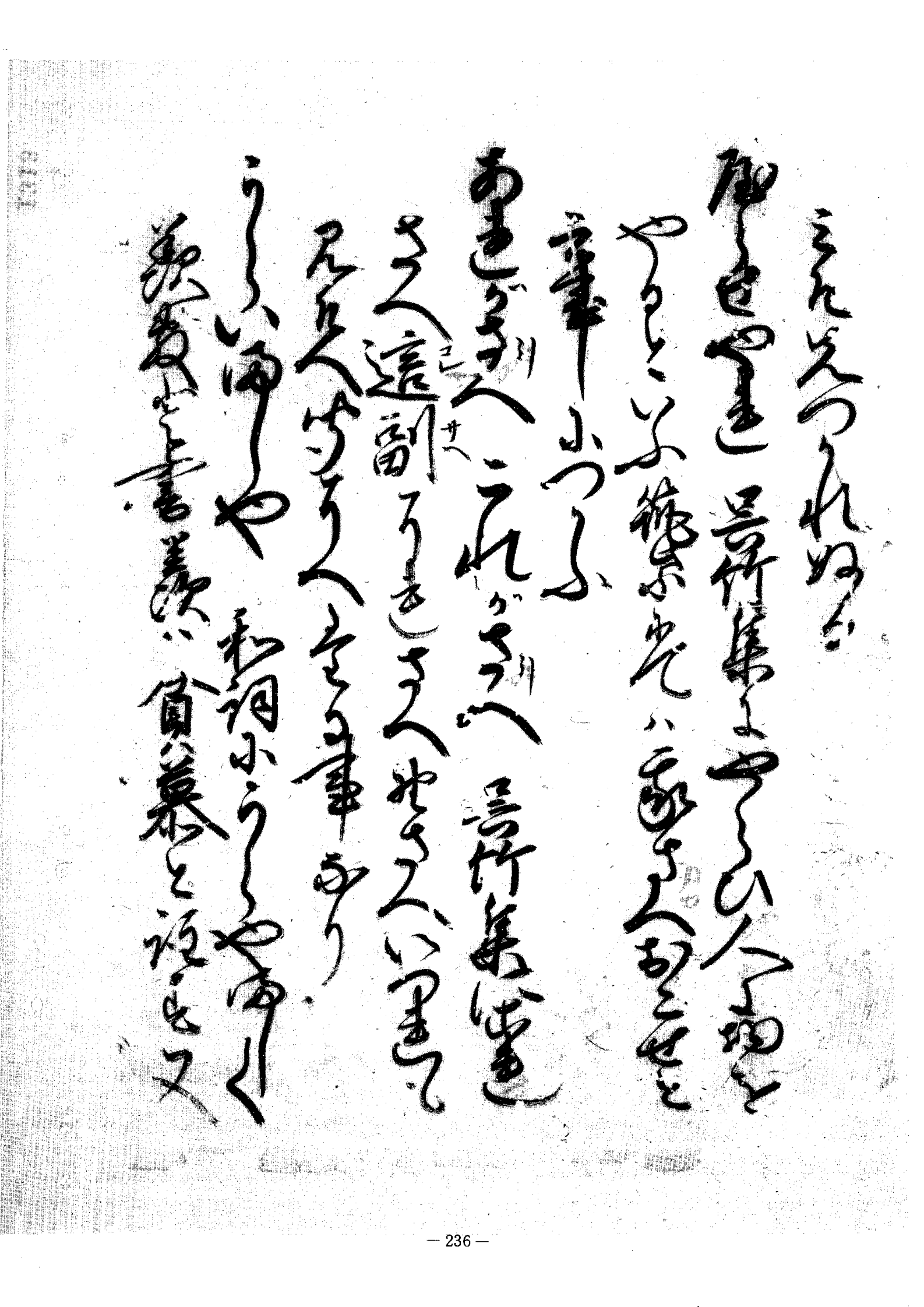
— 228 —

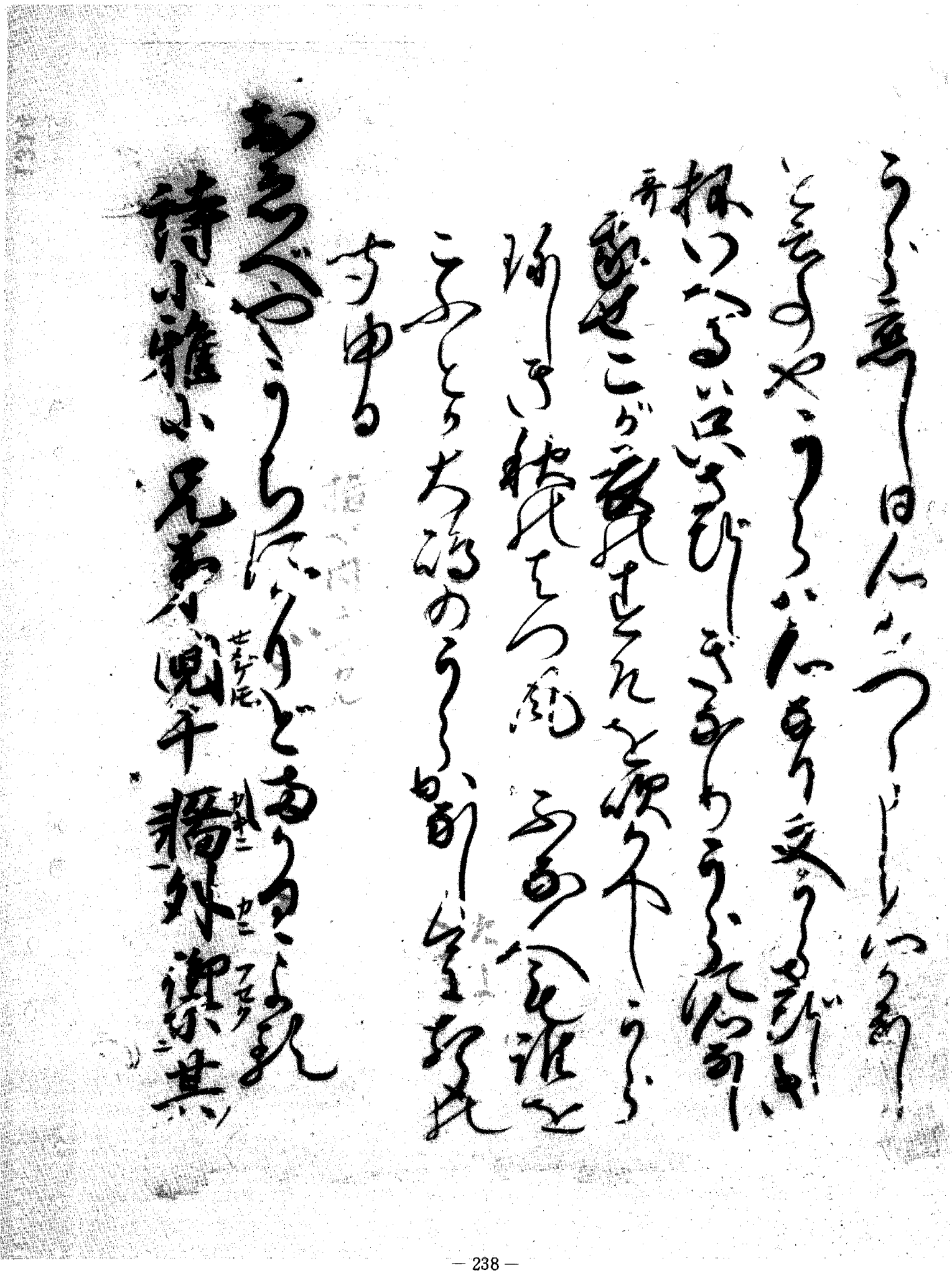




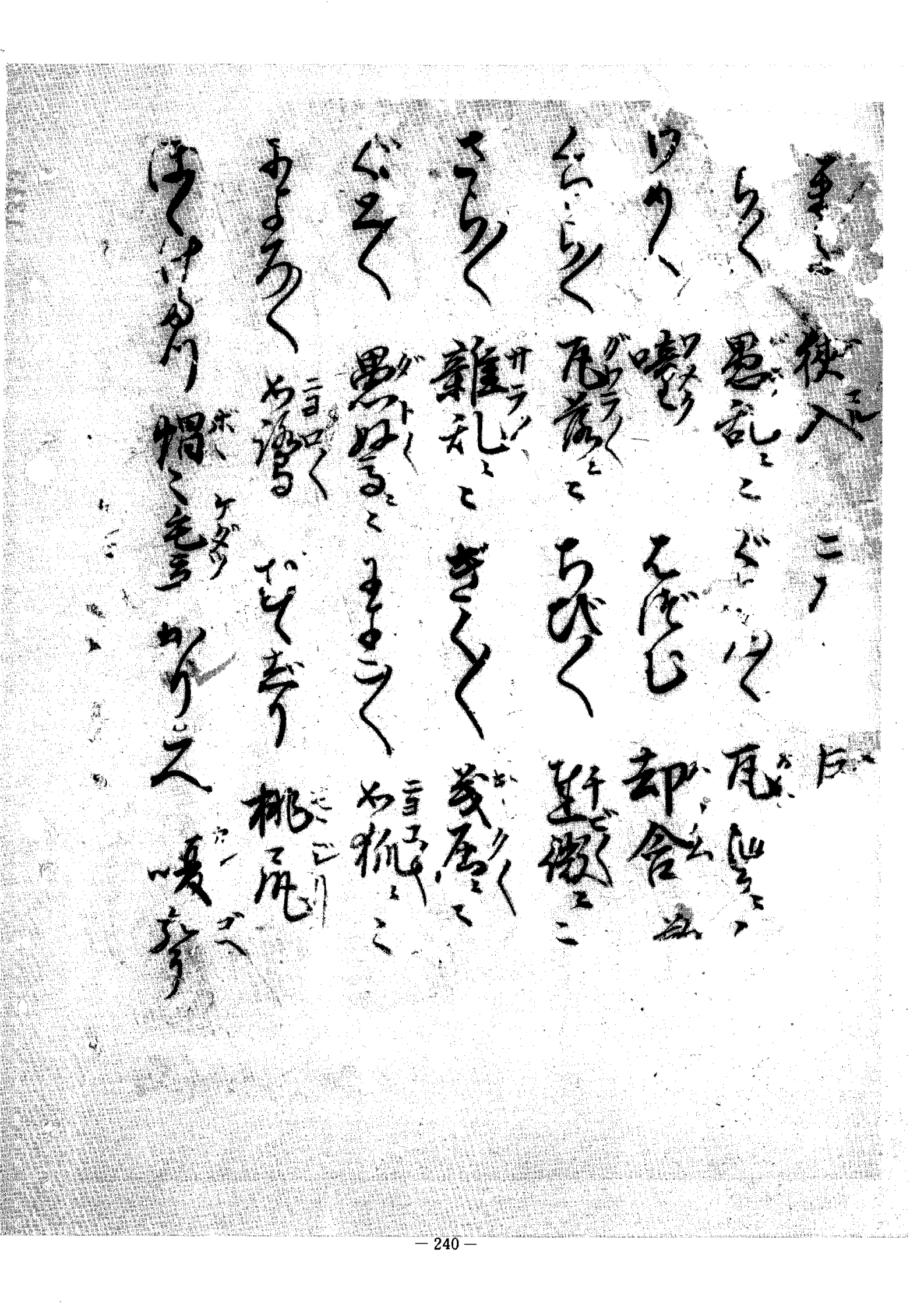
つひと　和泉小ぜんが　すみもと
つむぎ　　ウメリー・ヒルレイ・ラクル
　　スント
あすか　や　和泉小新造又左衛門と
云ふ　うつくしき女ぼうと
うわさとうわさとうわさと
和泉屋有吉行衛こうわさと
春小袖　如何なる　物をきると云ふ
評判　小姓　殿と言ていうこと
よもや

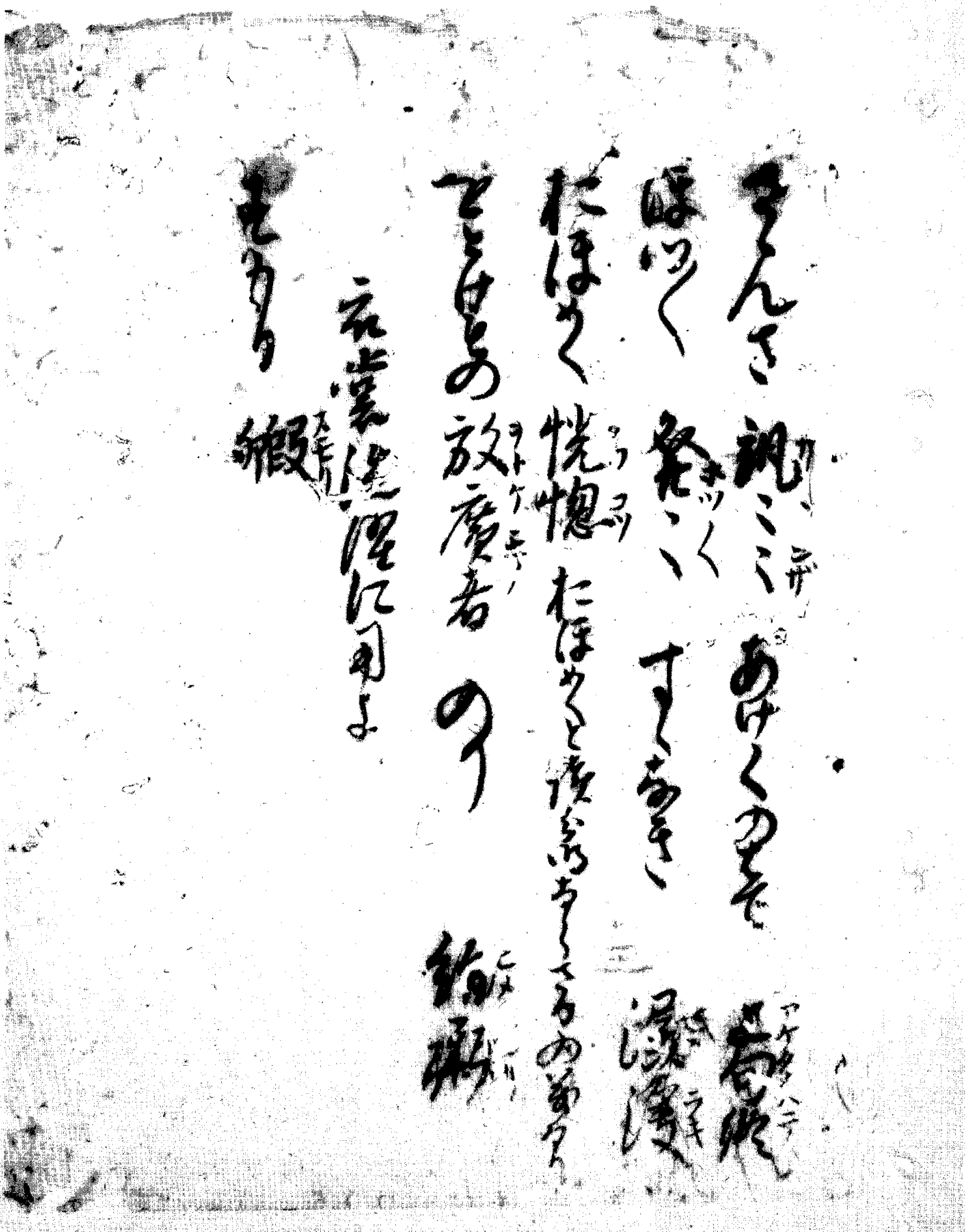






秋毎有良朋遠来楽しかた
おもしろ
いろいろ
品々と
ものごと
不ㇾ尽
飽
他人のうわさを聞ても多田しみたるとや
宅へ来
物語
読書 馬琴伝を読ら
小児
書
厭





あとがき

『混効験集』とは、一七一一年（尚益二）に三司官識名盛命ほか、七人が、国王尚貞の宣旨を受けて編集した沖縄古語集である。序文には、尚賢、尚質、尚貞三代の国王に仕えた老女官が、記憶している「遺俗流風の言」、「神歌の詞」を撰び、かつ古老の「口号」を聞いて冊とした、とある。乾坤二冊からなり、それぞれ部門別にわけたうえで上段に琉語、下段に和語による説明を掲げている。説明には源氏物語、伊勢物語、徒然草、呉竹集などからの参照記事があり、また「おもろさうし」や琉歌からの引用もみられる。

活字による紹介は、伊波普猷著『古琉球』再版（大正五年刊）が最初である。昭和四十五年三月には、法政大学教授外間守善氏による『混効験集―校本と研究』が刊行された。同書は外間氏の書誌学的研究に本文および本文写真を合わせ、さらに辞引をかねた索引、識名盛命作「思出草」を付録として加えた労作である。写真は沖縄県立博物館所蔵本を使用している。

このたび影印本として刊行するのも沖縄県立博物館蔵の評定所本である。同本は各種伝本中最古本とされ、国の重要文化財にも指定されている。原本は戦前尚家にあったものが、戦時中アメリカに持ち去られ、数年後に沖縄に返還されたという経緯を持つ。昭和五十一年度に国の予算で裏打綴直しの修理が施され、修理後の形状は経二八・二cm、横二一・二cm、乾巻が紙数四〇枚、坤巻八二枚である。外間氏の『校本と研究』の写真本は紙型がA5版と小さいうえに、綴代部分の文字が欠けるところがあるなど必ずしも十分とはいえない。そこで本県教育委員会は、文化財の活用と研究の進展を期して原本に近い大きさで県民に紹介することにした。多数の方々の活用を期待するものである。なお、マイクロフィルム撮影と焼付の都合から、朱書の一部が不明瞭となったので、朱書一覧表を別刷で加えることにした。

昭和五十九年十二月十五日

沖縄県教育委員会

評定所本

混効験集

昭和五十九年十二月十五日発行

沖縄県那覇市旭町一番地　沖配ビル

沖縄県教育委員会

電話　〇九八八ー六六ー二七三一

印刷　文進印刷株式会社

電話　〇九八八ー五五ー二三二三